あまの蛙

齋藤縣麻呂作

袖珍少年文庫　第九

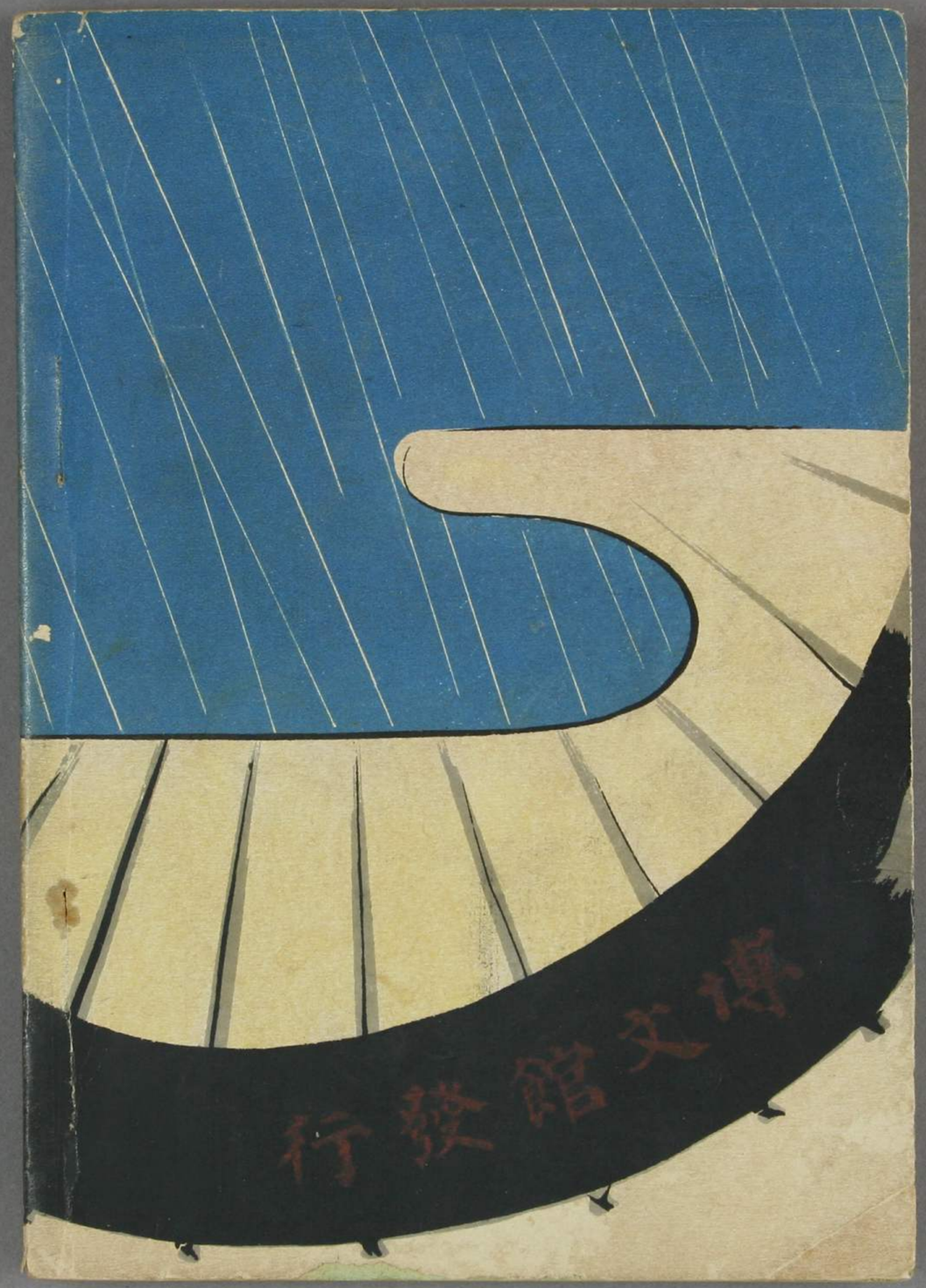
博文館藏版

齋藤緑雨作

青蛙

袖珍小説

第九編


商務印書館發行

咲いた花なら散らねばならぬ、醉ふた酒なら醒めねばならぬ、逢ふた中なら別れにやならぬ。花は櫻木散るほど咲くな、酒は劍菱さて男山、醒める程なら初手から醉ふな、人のあはれは博多の小女郎、笑ふたあとでは泣かねばならぬ。

略歴を掲げよとや僕の族籍年齢が知りたくば區役所にて調べたまへ番地が分らずば派出所にて尋ねたまへ正直正太夫と申す別號あれどもこれは證文の用に立たず戒名はまだ附かれど寺は禪宗なり幼より聰明穎悟は言ふ迄もなし右の手に管持つ事をつひぞ忘れぬにても察したまへ全體文豪といふはむかしから性の知れぬ者なり彼の沙翁を看たまへ集林子を看たまへ今以て性が知れぬにあらずや海とも山とも性の知れぬ點に於ては僕もたしかに文豪なり名刺の肩に大日本帝國文豪と書入れても諸君は決して之を拒むの權利を有せざるべしザマ見やがれと當人ほろす

あまま蛙

緑雨

かしこきは丁斑魚なりいつまで經つても鯨にならず尾鰭短き夢の世の浮草の下潜りてそれで一生を「たのしみ鍋」にも取込まれねば行方白瀧に搦まれてちぐはぐの丸箸につゝき散らされオット汁が同伴の膝へ飛んだ鹿匆もなし萬事斯う行きたいとは宵に猫に袋町をまごついて跡戻りする時ばかりの臺詞にあらず一頃流行りし陶宮にも分を守れとあるよしなれど兎角他人の尺取蟲あゝでもないと伸びる氣がおそろしく世はさて乞食唄の滅茶め

ちや忠義一圖のお乳の人と雖もまゝならぬは一日三度の炊加減やわらかいもあり硬いもあり坊ちやまいつも坊ちやまならず追〳〵御成人遊ばせば爾々は繪具筆に武鑑の紋所を彩つても居られず何かで當てたい山名細川お互ひに謀叛氣つよくイザと乘出しては見たものゝ一寸先は大黒毛獨樂でも天下は容易に取れず折角の思惑も端からガラリちがひ棚年が年中隅へ置かれて果つることと實にや池中の物に非ず泥溝の中の物と初手から斷つてないはおもふに張交を書いた奴の手落なるべし姓は荒子名は退學届を見たでなければつひ忘れたれど號が落雁なれば叩き上げて今では名代といふと西新井の輕燒まづいやうにも聞ゆれど百に幾

つの賣物とは元より種が別段の極印附但し其極印を熟視たら不用とあるか何うかは知らねど何しろ呼ぶにも天晴と云はねば文もきまりが悪い程の小說家といふえらい者に成澄ましィョと聲懸ける大入場前へ〳〵と出たがるゆゑ圖らず音に聞えるとは袂の銅貨に似たこと哉博識に於ては源氏も一通りのではいけず手の込んだ評釋の方がちやんと讀めるばかりか解らずとも解ると生れながらの神童とて八犬傳といふ浩瀚大帙の書を常に繙きしむかしもおもはれ坐がら名所は中の鄕の丹次郎が詫住居慥この邊といふ事まで悉く呑込んでなれど唯この上の不足を云はゞ僅拾錢前後のラセラス一冊にひよつとかすると氣の狂ふが險難

なばかり三疊敷の明窓淨几觀念を凝らすと云つては能はぬの禁句錄ると言かへた所で膏藥の如し白いものへ黑いものを塗つて切繼細工のぢゝむさいは夫れ淮南子に曰くが孫引の緣なきにあらず駄目とは宛字何か異つたのがと覗き込んでハテ子花のちら〳〵と散るのが續紛かとは机の下に詩語粹金があるのでは決してなし幼學便覽があるのでは猶決してなし日の本ならば照りもせめは萬葉集腰間秋水鐵可斷は唐詩選と疾うより心得月と梅春の景色もやゝとゝのひてと五百題を逆捻りに捻るほどの苟くも落雁先生は大家なれば其んな傳授の豈要らんや種は懷中の手帳に新聞雜誌から熟字熟語を拾ひ上げて傍訓のまゝ書留めて置くなどゝは以ての外の取沙汰髮とつゞけて讀んだは跡にも先にもタツタ一度それも全くは句點の打つてないが惡いのなり何かは知らず日々行列さするを伊勢屋の臺所で頻りに羨ましがれど近寄れば生中字の形をしたゞけ油揚も附合されずこれの桝目はページと稱へてなにがし歟になることとなれば熱はいよ〳〵のぼる一方天狗が面は手遊にもあれどせめて斯んな事でゞも高くせねば生涯わからぬ鼻の所在かも知れず風俗は正に是れ京傳本の丸うつし柄の出合はぬ上着下着都合に依つてどちらにも着ることゆゑ別々前は結句勝手あの化物と床屋の親方は蔭で言ど化物の化に人扁のある内は當らず神韻縹緲を聞嚙つて其お經が狼の

啼くやうなれば如何樣けだ物かとは猶當らず何れこれらは不學ふもん品第二十五や六で先生とたてられ觀音も及ばぬ功德の目に入らぬ言卿題はお定りと云つても大臣大將の往來にはなき二號活字今度のは見ものとの豫告も道理御召縮緬に裾模樣が置けるやら天神髷に金絲が掛かるやら發明家をも兼ねたる貴さ荒子落雁これにありと反身はきこえたれどそれで緣日へ行けば矢張押されて居るは何故か解らずやがて美の穿鑿から戀は附物と元來の色氣にも躰のいゝ理屈を揑廻はす温飽粉衣にくるんで揚げて見れば曖になるまでは鰯の臭いも知れぬで持つたもの裏隣りの紳商が控邸に保養旁々このごろ來て居るは令孃のあん子とて

年も丁度よし十七八の初櫻大分春めく鶯のおほゝといふのが耳へ這入つて折節の隙見も未お姿はおぼろ月夜お誂への琴の音に妙々と膝を敲くは先生がいつもの癖笛もなし鼓もなし有つた所が何も知らねば此牛若は物にならずどんがらがんでは調が何うあらうかと窓を明けてオホンといふ咳は幸ひと清音で出たれど向ふの二階は戸がピッシヤリ居ますよと幾ら伸上つて見せても納まらずそれでも失望の無いが先生の美德自分すら褒めるを人の褒めぬ筈がないと書かぬ先から好評は常々看通しのことゝて寐てから枕と相談は一部の出色小說家はみづから小說を茄子漬刻込んで仕舞へば帶も見えずつまりは自分を「かくや」

の香子古いのでは少しも無しあれが見下すおれが見上げるアレとオレと韻は一つ互ひにぱつとするのが初やまぶみとは今更承はつて果敢ないにおどろく戀の成立この鹽梅では男たるもの女たるもの迂濶に顔は合はされず毎日々々の鐵道馬車ばかりにも戀の落て居ること幾千ぞお掛なさいと退いて遣るとゝもに其年増の頭に案外な禿のあるを見附けてうんざりする如きはよく〳〵深き緣なるべし是非小説家をとあれが願結婚を申込まれる此方にも異存はないホヂームーンと來るそこで持參金はなどゝ先生にそんな慾は萬々なければ該一項は後人の附會落雁口述あん子筆記で一世を聳動するヂと地口行燈にも曾て無い圖それか

らそれからと稻荷の祠あかぬ工夫に眠られず明ればふだん床離れの悪いに似ず軒に雀の飛び起きて朝から障子明放し子供がいふなるアノヂぱかんと終日待つたれども向ふには人の影も見えず銀簪に艶書を結び附けてソレ其處から投げるといふのがツイこの程迄新聞の挿畫にもあつたと時代な智慧を順に言はせても一人では果し無しあれは歌も詠むと聞けば今に短冊で來ることか然らば徐々返歌の支度もして置かねばとは先生の洒落にあらず極めて眞面目の所なり堪兼ねて塀際近く寄つて見ると椽側ともおぼしき邊にすべやと優しきあの御聲玉を轉がすやうなれば景物は湯呑か急須か一ぱい壹錢と斯んな時に贅をいふ勿れおし

まひは何うなるの可哀さうに焦れ死かゞとは新版物の噂らしきにさてよくしたもの片時忘れぬはと猶耳引立つれば誰の彼のと果して仲間の名は出たれど落雁といふ名は終に出ず其んな筈がと考へるにいかにも筈はありま山いなにはあらぬ稲舟のとは曲亭氏の金言戀は人目を忍ぶに募ればうちつけに口には出まいと微を穿つは先生の本領しかし何だかまだ氣懸りの小首を傾けて居る處へすべが手水鉢の水いたづら泥坊猫へぶッかけた餘沫を浴びてハッと一遍は飛上りながら急のおちつき顔へゝのゝもへじを強て片づけ濡るゝは戀の緣語あやなく今日やながめ暮らさんと已に人丸も言置いたとは流石社會の先覺者御人躰は爭はれ

ずたま〳〵二階の手摺に寄掛つて大欠伸のあん子孃と斯う言つては趣無し高樓の欄干に身を憑せておもひに亂るゝおくれ毛の二筋三筋それが無ければ元の猿だと其邊で憎まれ口は何處の烏歟可愛いゝのがソレ御降臨と見るより早く開たり閉たり窓の障子の忙しさ恐れ氣もなくニヤリと笑ひ懸けると向ふは忽ち顔背けて其まゝ奥山とコレハシタリ釣込まれた奥殿深く入り玉ひしにあゝ此味ひが言ふ可し言ふ可らず乙女が戀の初もみぢ耻かしさうなと形容はお手の物薄氣味悪いといふ事は先生のお國にないと見えたり風にひらりと此方の庭へ手巾の落ちしを來たゝと慌てゝ駈出る拍子戸袋の古釘で袖に鍵裂きも戀ゆゑなれば厭

はず唯あとで來客に接する毎にひどく左を氣にして居るだけの事又も舞上がるを拾ひ取つて何處ぞにいとし床しの落雁樣は語呂が悪し雅號は斯んな時どうも不可ず何か書いてあるか縫つてあるかと透したり返したり裏も表も幾度となく檢めたれど見つからずさては世間をかねて焙出しでゞもあるかと早速火鉢にかざしたれど坐に少々異なにほひの薫ずるばかり遣るぞ白手巾文と讀むべき謎にしては此の汚點が合點行かずと日頃豊かなる先生の想像もこれには些到り兼て居る折柄御免下さいは正しくすべやハヽア花鳥使は跡からかと窺ふに何うも失禮をとあらたまりし口誼ナンノ戀するが失禮なら濱路は信乃へどれだけの失禮

か知れずと諳誦の結果は急塲の間に合ひて御遠慮には及ばぬと飛あがる桔槔態々井戸端へ出て自分で聞けば先刻干して置いたわたくしの鼻拭風に吹落されましてと爾正體が知れて見ると幽靈にしても氣ぬけは自然の勢あきるゝこと是亦諳誦の半响許堅田臺所先の光景落雁登塲と願はくはこゝは後年先生一流のドラマにて拜したしこれ程おもひ合ひし兩人の中を今に何等の沙汰も無いはあれの親父が不得心か贏利一向の慾は知つても塀一重の隣に天下の秀才の潜むを知らぬが凡俗の淺ましさと云つて假に此塲合に其親父が先生であつたら何うしたもの世は未小説家に切貫を添へて行けば兩替屋で通用するほどに發達して居ず

あれの目が物を言ふといふのを今の小説で書けば渠の眼は絶えず戀を語れりとある何れにも切なるあれの心がふびんなればそれよ新躰詩の妙はこゝらの事筆に思ひを運ばせておれに渝りのないことを知らせて置いたら少しは氣も沈靜かうかとは何處までも脚色はうましこれが活字にさへ成つてしまへば詩思湧くが如しの喝采は請合ながら机の上にある間の難行苦行悪く摸字ればヒヽ泣くが如く思附いてから幾日目か天來の興は雪隱で浮んだ一句「ある夜ひそかに」と念のため指で數へてこれが七言「松の月」とこれが五言七五調でなければ流暢に行かぬと「厠に入りてながむれば」を其儘は清新々々試みにこゝに列ねれば

ある夜ひそかに　松の月
厠に入りて　ながむれば
十三七つ　まんまるの
大福餅に　似たりけり」
喰べたら嘸や　あまの川
わたせる火箸　ぐらつきて
こいつしまつた　灰まぶれ
置く霜白き　皮の色」

毫も晦澁の痕を見ずと例に依て先づ自分から感服したは客人に羞むるにお鹽梅見といふのがあるのと異りはなけれど三段目

の「燒けるにつけて君が名の」とまで來て「あんこハミ出す」の下が何うも据らず頭を抱へて轉がつて居るときお隣では明日御婚禮と人の噂お婿樣とはおれが事か其んなら爾と早く通じて置けば斯んな苦みはせぬものと起上つた甲斐もなや豫てあん子孃の許嫁留學先より此程歸朝し彌々式を擧げるのだとは之れを都〻逸子に尋ねてもいかなる出雲の間違やら不完全極まると先生がかぬ〳〵の御論も尤も今の社會に佳人才子は先生の著のやうにシックリ合はず向ふへ廻つて聞いて見れば隣に變な奴が居てあれでも小說家ださうだなどは極内々々先生其後人に語つて曰く僕もラブには一度失敗したよ

嘗て英の子と交通の便開けし此節例も日本だけでは狹く遙々のところを引張つて來てパイロンも遣つた事さと何日の間にか文豪を以てをりかゝみ自分できめて居るに他人が故障を申す可きにあらず瓦を偶さか伯父さんでも見えて爾してばかりも居られまいと異見めいた事の少しも言はるればこゝぞと蘊蓄韜藏のきゝ取法問出所を考へれば寧ろ訪問と書きたし貴方のが眞理か私のが眞理か到底未決に居て見れば保釋は何うあらうかとはテツペンハヽアとて名は西洋でも其躰をあらはすテンから合點のいゝ人が二千年も前に說いたことがござると岩永に於ける重忠二言と言はせずこれが大坂仁和加なら阿古屋は阿房や伯父さんは

唯驚きのだんの浦兜を脱いで引下がられたは多分天職と嘆息を一緒に食べておつもり〳〵モウいけませぬと悟られしものなるべし世には斯んなのゝ跡から尺持つて追駈けるたぐひの批評家と云ふのが殊にこのごろは澤山に蟻の塔根よく一々手に取つて客觀の主觀のと一貫が借のまだ蕎麥屋に殘つて居ながら天地宇宙を觀透した氣の色眼鏡青やら黄やらの嘴から審美論の百〻囀り仰々しうは搆へるものゝそれも彼此れ似た山伏まけず劣らず御同樣に吹くかひ冠り向ふで轉べば此方でも轉んで居る義理の堅さ傑作々々と今では傑作は小説の綽名けなさるれば讀まずほめらるれば屹度三度は讀返して斯うでもないのさと先生の内心舟ならざるにニタリ〳〵押の強いは櫓もおよばず凄絶壯絶の絶が氣絶悶絶の絶でないのが物の不思議たとへば漢詩家の起首殊に妙の妙と美イちやん春ァちやんの妙な人だよの妙と字は一つでも譯のちがふを見て會得すべし一度か半分宴會で逢つた赤襟あがり何處でかお見掛申したやうなとは人皇何代々の常文句先生奇想に富めりと雖も天外より來つたのでもなければ生れは同じ大和島根動ぎのないことに昔から極めてあるを盜るゝ如き創作の才はこれをも追さぬ奇遇の發端一篇の骨子でゝもある氣で能くおぼえて居たノとは御自分こそ能くおぼえて居たノ何れ前世は牛か豚か三世相に據つたら動物園でお見掛申したのかも

知れず何うぞねの一言に又もや戀は忽ち片々だけ出來て不圖それから途中で行逢ひしに此方はおひろひ向ふはお車匆忙しく帽子へ手を懸けしも百二百の來會者を皆知己と認めねばならぬ義務も無し此ぬし誰れと書いた金蘭簿も無し歩きながらおもひ出し笑ひを仕て居る人があるよと合乘のお酌共々他人の顏附之れを先生の解說に從へば態とすげないと唄にもあるがこゝの趣だとは偖々戀の極意といふは側目で見ずとも間の抜けたものなりまた宴會のあれかしと待てばかんろと洒落のやうに拵へてない世界の日和折角の照を明日はつゞかず降にしたは臍緒以來切るは初めて自腹の茶屋遊び何んな呑めぬ酒にしても先生の御作

ほど頭にのぼらず敷臺に躓いてオット下足札は無かつたッけと新規お一人樣のお里をあらはしながら彼處のきんとんはいつも冷たいの此處の刺身は赤いのがないのと直ぐからの通論發揮犬も玉乘をする世に人と生れて此の位の多能は當り前小ぬかをと呼んで見ればそらさぬは先の商賣例の貴郎やの二三度も振撒かれると最早長火鉢の向ふへ据ゑられて其處の抽斗から海苔を出して下さいの託宣にも預りし料見あいつの家は此邊と態々覗き込んで通つた跡に格子戸の明く音さては早くもおれの影を見附けてアラまあと飛んで出るのかとおもへばお隣の阿母さんと阿母さんとが内外の問答ほんとに物騷ですよウッカリ草箒にしろ

出して置くとそれを立掛けて火を放けますとサ今も迂散臭い奴が通りましたとはお前の娘の意中人だよと額に烙印の押してなかつたが互ひの不念併しそれとても往來繁き都の大路小路オヽイ〳〵と背後から呼ぶに皆一齊に振返る所を見れば敢て先生の事と限つたでもなし今度の中幕は是非觀ねばと初日前から附込は他のする事こちらは日取も割當の招待見物いつもなら此狂言の書卸しは王子路考に目黒團藏それに名人は京橋五郎兵衞淺草平右衞門若手では太郎九郎助紋三郎とお年ともおぼえぬ歌舞伎談義活きた年代記の證據には菓子も食ひ辨當も食ひ鮨も食ひ跡が椀燒の一酌の殘りをも持つて歸らるゝ筈のところ恰もこの日

小ぬかゝ土地の總見物眼の下に來て居て見ると先生得意の斯道の故實も先暫くは其方除け知らざる者のあらざらんやと頻りに首をノベリスト因あり緣は爭はれずと敘事にも敘情にも未大切の來ぬ內から釣枝の花紅葉いろ〳〵の振を盡せど先は朋輩と買喰ひの茹玉子きみが方へとは少しも向かず齒に着せぬ絹手巾に受けて唯むしや〳〵と遣つて居るばかり勿論うしろに舞臺は無し上から白粉つけたのが覗き下すとも知らねばとは木戸からうづらの素人考へ之れを奈落の底の深く究むるに戀には人前こゝだナ〳〵と稼業柄とて先生が長けたる觀察モット長けたら下りの棧舗へ顏出しはお辭儀が二重になるとの遠慮かも知れずハヤ

るとひとしく車を飛ばしたれど先も芝居から直ぐと廻つて生憎出て居りますに先生は麥酒の口のぽんと拍子抜貫つて來いと洋盞取上げて戀に待身のつらさと云つた所が先生が原稿の催促にあひ玉ひし時の如く待つて呉れと誰もお賴み申したではなし口續けの小ぬかは來ぬか音相通じたるが讖をなしの礫叩いても打つても痛いのは此方の手モウか〳〵と眼を皿の肴も追々と嵐の跡看渡す山々骨露はれて殘るは模樣の唐草のみ獨り句讀のぽつねんと思ひに痩せる蠟燭の涙顏あいつ不來夜沈々と大きに燒ける氣のする中から正可せかれたのでもあるまいと平仄の合はぬ偶坐偶感翌日は約束の筆も取敢へず新聞の古を書肆の新版出直

して行くと昨晩は何うもに安心は先生の附物濟みませぬと熱いのゝ一つも酌がるれば即坐に相好の崩るゝこと荒子落雁の名空しからず甘いのを例に依てぽつ〳〵出し掛けたのが先方ではキツカケ御挨拶にと下坐敷へ立つてゆきの肌高潔々々と見送つて居るのが間違ひでなければ心靈といふ語と置去といふ語とは用ふるに太だ區分し難し漸と上つて來たか長さんと欠伸ころしの鼻唄モウ十二時なのですよをお歸りなさいの謎とも知らずウム夜が短いとは感動も斯う行くので先生の小説も萬々歳幾久しく通ふつもりで居たれど此間迄三錢五厘の割前を爭ひし身は毎日書く新聞物何處にか續かぬところがあつて乍存當分御無沙汰こ

丶を先生の體に倣へば楷にそぼふる雨の朝窓に照添ふ月の夕何うして居るかとおもひに堪へず此思ふといふのが神聖々々と頗る思ひがッて見ても先の神聖は何うしても居ず今朝は納豆へお鰹節をかけお湯の中へお葉漬を投り込んでそれで茶碗の中を掻廻せばおまんまは相濟みお座敷へ出れば先生に言つたと同じ事を言つて折にはコラサといふ掛聲でもして居るまで爾どなたにも打明けて言はぬが花札を出したばかりで胴仁へ青が懸つた口を氣のきかぬと呟きながら冥利に盡きると不勝々々出て見れば あの唐變朴めとは先生に係る話か否かは聞洩らしたれどおもひ出すに於ては此通りおもひ出すのなれば矢張おもひ出すといふ

のが論は至當歟玉祝儀の德は先生が述作の結構と肩を駢べて大きし〳〵インスピレーションは洗湯の歸がけ近所の子供が唄の誓古おれに似た境遇も聞けばあるものとつまされやすで拾つて來て間もなく先生の筆に成つたは已に命題からが奇警の『ぺん〳〵草』これを賣出す日には綴は無論三味線絲表紙の摸樣は撥に駒に胴掛口繪に五大力の三字は自筆の書入れ序文の代りにめりやすの中程帙を猫の皮で拵へぬばかりの意匠それもことに依ると厚紙へ穴を四つあけてこれは何でと尋ねると四乳でといふやうな事になるやも測られず趣向は小ぬかのやうな女と先生のやうな男と散文詩とかで云へば女もほれしなり男もほれしなり

兩人は相惚なりしなりの始終に生死が搦まつて結局は何うなるか其場に至らねば先生にもわからぬ由今左に其躰裁の一斑を擧げんに

「忘れやしまいね？」

男は言つた

「忘れません！」

女は言つた

「屹度だね」

再び問ふた＝力を入れて＝

「ハイ……」

直ちに答へた

尋常作家の企て及ばぬ變り縞一見甚だ白つぽしと雖も紙の高下は先方のふところ扱差の附くだけはつけて斯うして置けば行も殖る員も殖る隨つて重量で賣買の當節は殖るものが最一つあるなどの世帶話は本題に要なければ言はずいくらか這入つて見ると寐卷を裏返しに着ていとせめて戀しき時では氣が濟まず逢たくもあるし逢たくもあらうしと久しか振に出掛けて行けば案の定小ぬかはいそ〳〵障子をあけてからオヤあれ違ひだよと怪現な顏附に思ふは眼の明ならざるもの先生が見れば雨になやめる海棠戀にやつれて口臙脂の薄化粧二重の帶が今日は幾重廻つ

たと尋ぬぬ内が辛防強し蟲が知らしたのかゞとは蟲も色々いゝのは松蟲鈴蟲轡蟲わるいのは何處にも行當りバッタもあれば蚰蜒もあると茲で理論に流れては小説は進歩せず爾でもあらうと先生は吳王扶差えつに入つて凭れかゝる柱の斜ならぬ御氣色ねだられもせぬに買つて遣つた羽子板其んなのは家へ歸れば凡そ四五本もあつて此れは下地ッ子の手に渡るか差配人の子に遣るか其處迄はたゞさぬが大家の器量お蔭で兄ィさん〳〵の親類交際側へは人三々々と聞えるといふも是亦耳の聰ならざるもの何方を病院へ入れやうにも懷疑と云つて哲學でも始末が悪く先づ少いのからすれば先生を入れるのなれど肝心かなはぬ事には當

の患者は範頼ならず疾くより兄ィさんを以て先生は自ら任じあいつ來たナと校合摺でも請取つた心得文選のわるいのか植字のわるいのかシンパシーが妙な處に轉がつて居るので手が附けられず猶ほ何か用がある氣で待つて居れど今では屈原も汨羅へ汽車で行き族籍不明なれば撿視の上假埋め直ぐと郡役所の掲示が新聞廣告に出て心當りの者は申出づべき程の手廻しのいゝ世なれば中々先方から吾が親愛なるなどは端書にも來ず儂だッて女ですもの色の二人や三人無くッてサと度肝を抜かれた序に色氣をも抜かれたら生涯面倒のない筈を糠ちやんが宜しくにおれがあるぞが又附纏つて何うだらうと思ひ切つて女中にたづねたは

先生の小說が歷史で見し土蜘長々諸人をなやましたと度胸孰れぞアラとはおどろく時ばかりの詞にあらずあきる〻時ばかりの詞にあらず讃歎にも感激にも出ることなれば此分は何處へ附くのか知らねど兎も角アラと前置があつて糠ちやんには些過ぎる程のが今にひかすかも知れませず浮氣仕舞だと云つて木挽町の を買て居る譯ですから其上はお腕次第とつれない挨拶腕を論ずるは批評家のやうなと急に扼つて見ても追附かず其頃どこのか社を受持て居れば二三日は著者病氣に付休揭なり先生其後人に語つて曰く僕もラブには二度失敗したよ

按ずるに一生は一升か飲明かすべし一代は一臺か乘暮らすべし

七子の羽織と二子の羽織は差引相違の五所世間はもんの有る無しが馬鹿と利口の榜示杭何う繩を張つて置いても潛るには法も潛れ破るには道も破れ笠何となりとも凌ぎのつく〳〵お察し申すに今度は小說家を產もと云つて產んだのではなし匙の少しも持てれば醫者になり口の少しも利ければ代言になり强いのは避け弱いのは蹴込の敷皮ぐツと蹈まへて立つところを一旦の過ち底知れぬ此溝へ落ちたが最期モウ上れず泥に咽んで捕まへ處も と藻搔いて見ても浮ぶは虛しき名ばかり徒らに傳はりて我れと我行手の邪魔どちら向いてもひとへに敬して遠山櫻一寸拜見しましたぐらゐが精々の世辭こゝに一年は石の數三百六十碁盤目

の罫紙と睨め競一字置いては考へ二字置いては考へ眼を白黑の苦しい職分それも多くは負のみ込んで代金といはず報酬と云つて自分だけは澄まして居れど向ふから云へば矢張判取帳に載つて居る譯躰のいゝのと割のいゝのとは兩立せず五斗米に腰を折らぬは聞えたれど本屋の子僧に頭を低げるはチト理屈に阿波の十郎兵衞屈托の絶ゆる時なし卑しい事を言ふなとあつてもお客樣へ出した到來の羊羹障子の硝子越しに指を嘲へてコレと叱られて育つたは平一面特に文學者に限つて霞を喰ひ霧を吸つて立つにはあらず飯米の料をも拂はねばならの葉の廣い世界に家賃だけでもかしの實の一人位ゐは寢て居ても消光せさうなものな

れど其處を爾行かぬが辛氣新網の果でも何によらず口を動かす算段と斯くは氏神なれば最負の月掛け持て廻つて案じるものゝ先生は先生だけの異つたお說があるかも知れず伺へば此度の戀は大分の痛事貼るは同じでも膏藥よりは印紙が利いて癒える迄には間のある外科療治跡を何うしたものかに一倍貴重の腦を絞れど到底こし切れぬ晦日蕎麥延びる程は延べて五日に來い十日に來いと斷方にも五色の息を月末の大修羅場敵はぬ兒せと大抵に家を脫け出し生活同樣目的の無いぶら〳〵歩行暮かゝる空をながめて斯んな時によく出たがる運命論造化々々と連りに呼懸くれど呼ばるゝ造化は迷惑千萬原稿料を請取つて歸る時に一

度も讀んだ例し無し斯る文豪が後減りの下駄穿いて往還にのつそりと立つて居るとも知らねば車夫は猶豫せず聲を掛けて退かずば背後からドンと突退けて往くに先生は不興氣と云はんよりは恨めしげに目送つて厭世の事厭世の事と際どい所で大悟徹底懷中相應の淋しい町へ曲らうとする時荒子君と呼留めしは元の學校友達元氣消耗の躰だな晩飯を突合ひたまへとは成程隙の折は造化を呼んで見るのも損にはならず酒の一二杯も廻つてあの作は感服だよ實に能くキヤラクターが顯はれて居るよと好評の一つも聞かせらるれば三十分前の先生とは全然樣子が變つて來て今度は樂天の事樂天の事と献つ酬へつの器なれば主義も猪口

が左右するは然のみ緣の無いにもあらず益々景氣づいて僕にもいとしいのが有つたよなどは過日御惠贈の小說より凄まじゝ君は未あの味は知るまい都に住んで秋刀魚の腸に舌を打つ身はまんざらあれも捨てたものではないよ覺悟さへ持つて居ればいゝのサと何事か友達の誘ふ水根が浮藻ほども定まらぬは筆にも知れし先生なれば肚はこちら向きながら足はあちら向いたとは何處へ向いたのやらおそれ保名の狂亂同然戀よ〳〵と戀を呼賣は先生の專門可愛の可憐のと文章とかで見れば何の仔細もなけれど之れがいかなる清淨な戀でも卿よ卿は吾れを愛する乎然りわれは君を愛すと口の先だけで縱しや先生たりとも宿つたので

はなし裏へ廻れば凡夫と言ひも了らぬに表へ廻れば小人かと此處は往來々々まぜずに急いで行く路々白きお馬に召したる殿御あの鉦は道哲だらうと不相變の博聞强記考證の明る過ぎてたそや行燈と見しはおでん燗酒八方まばゆき金魚の不夜城どれでも賣りますに目移りして何處へ戀を持つて行つていゝか先生にはわからず巍々たる三層四層の雄大なのよりは今の小說は皆纖巧と花簪のぴら〳〵した所へ友達の這入りしに先生も續いて飛上れば程なく出で來た中にも貴方樣のは何處から何處までまん丸づくめ宵に御勘定を下げさせる點から論じても現金掛直無しの月の顏チラリと拜んで歸つたのが又々先生の病附馴染となれ

ば向ふも寬いであんたの手の軟かいこと算盤一つ持たないのですねと知己の一言千載の下を待たず散財の下に銀貨入れまで看通す烱眼算盤持つほどの手元でないと向ふには註が這入つて居れど知らぬ先生は大滿足まことや偉人は茶棚に見えぬはじけ豆隱れたるところに在りと感服と一ぷくとを併せ頂いておれが賣買で立つやうな俗物かと反つて見せても實は明日の朝のピンヘツト一箇で多分沒落勤め人なのと問はれて否々其んな物の本の作家とは能う臆面も內容は內用手馴れし樣まゐるに筆を染めて表紙の見返しへ著者謹呈それが赤本の國定忠次と簞笥の庇間に隊を組んで埃に埋まつて居るなどは仰有る通り俗物の知らぬ事

なり小說家の小から取つて小さんと呼びませうとは緣は異なものあぢな彼女の眞善美文學思想のあるのが妙だと例に依て一應の照會もなく一件氣取お安くない料を拂つて恥しいよ嬉しいよ恨みだよむねきだよの辻占文句を聽きに三日に揚げず通ふ千鳥なみ〳〵ならぬ信仰の今の作家に缺けて居るとは蓋し論者は落雁先生あるを知らざるもの乎ふびんと思つて來て下さいとは出て上げますの畧今夜は田舍者のタヂレがと一寸のやうに拔て行たまゝ遂に見えず見えるは寐て居る頭の上に石版摺の額は幼兒の三人上戸泣いて嬉しきこちらに居られず笑つて悲しきあちらに居るも勤といへば怒られずとは彼方と此方を一處に寄せてあ

ッちとッちの粹樣素養は醜刻の二筋道きぬ〳〵の別れに羽織の袖を梯子段へ引懸け何うも遣りともないと自分丈しよげて實驗實驗と實驗が入用なら小說家は盜賊もせねばならず欺騙もせねばならず但し人殺しは毎々小說で結末のつかぬ時やつて居るゆゑ之れを昔の仕置に照らせば差詰磔刑市中引廻しの段になると今にあいつと二人で目黑に居ると先生なら言かねず此間あんたが歸らはつた跡で腹でも立やはるかと氣になつて晝も寐られなんだの下へ流連の客有之候に依りのビラでも下げたけれど爾か〳〵を定連の行渡りし先生嘸かしと云はぬばかりに點頭いて斯うして來れば宜らうとは何處迄馳る天才やら殆んど窺ひ知る

可からず解くに豆どんも苦しみおばさんも苦しみ先生も亦苦しみは自ら稱ふる戀の山いよ〳〵登詰めて此の先は工面も南無網島隣で通す大長寺のかねて愛讀の世話淨瑠璃先例にまかせて橋づくしで行かうと謳ひ出しの走り書とも見えぬに原稿はいつも消しだらけの此紙治殿の覺期のよさ總じて心中物を論ぜんには少くとも引け過ぎの景を知るを要すと危急の中にも文學評論綽綽トシテ餘裕アリと先生はこれを讀と歌祭物語に女の氣を引事大門口の薄雪を知つて居るかといへば彼處にあるは水菓子屋あれは淡雪だすとイキナリから通ぜずいゝや近松のといへば其んなお客は來まへんと猶々通ぜずこゝで若テーストが無いと云つ

たらまだ出稼中と答へるに相違なけれど廊下で朋輩に背中敲かれて小の字が附いてますよを定見ありと先生は前後も見えず戀の神髓を得たもの夫婦とは主人公につれて洒落もむづかし燃ゆるが如き情熱は遂に一篇の戲曲といふのか阿房陀羅經といふのか能くは聞かねど出來上りし所は

うつてんばつてんぎり〳〵決着ごろぴしや　雷　どたばた煤掃。ちりからたつぱう鐵砲佛法とらやあやあ。きやつの姿とわが姿見返り柳鰈比目魚。まぐろの土手の夕嵐身を切賣の皿の内。赤い褌は年季が長い　紫　やお部屋の穀潰し。何處のどゝいつ素見唄。聞くに附木に直はいくら二百は高

い百五十。差引わづか五十年。人間定命定見世同士。まけておきなの飴賣りが大音寺前大音に。買つてかへるの頬冠り。逆さにすれば竹皮はほんに川竹うき勤。隅から水のぽた〳〵〳〵。誰れと寐酒の一杯々々。殘らず稼ぎ入揚ていつぞは荒るゝ山の神。異見の種と知られける。下足の札の一昨日からあばいがわるい日がわるい。今夜も見世をひこで居る。仔細は別に樓主にて一寸きな臭かんこ臭。煙つたげに立上り。

先づ此位ゐで止めてもとまらぬは先生が心の駒跡を來いの立引に跳つて親身なればこそと緩む手綱鞭も家もあることならず後

に評釋の梗概のと他人の手にかゝるも煩はしければ今から自分で書いて置かうと揚句はミス手古鶴の人生觀をも論じかねぬ勢ひ漸と日切の仕事に逐はれて一週り程遠ざかりしに肩書にたよりのとあるお文到來心矢竹に思ふてもかと手に取上げ女でも是程書ければとは書ける筈書記さんの代筆なり御ひらかせの程も御面倒ながら御たづね旁々申上　候扨とやの活版文句順次敬讀するに一日も忘れませずと云ふに至つて先生圈點の打ちたげなれど其手間あらば願はくはあの野郎と朱書したしお金が五とまで讀んで初めて途胸をつき果てし手文庫ふたゝびはならぬ酷才覺に明日ともいはず貴命に應じたれど戀も波瀾がなければと

口說がゝりにヂラすを無心だ恐くば來ずともいゝと天女に似合はぬ毒口琴線は金錢か實はこれにと差出せば其儘懷紙に挾んで今晩も又あのタヂレが來て居るの待つて居て頂戴とは定めし積る話のある事とまんぢりともせぬ間に明の烏は紋切形六つ鳴る大時計を狂つたのぢやないかとは誰が言ふ事さすがに希望を棄てぬ先生もこの朝のみは聊か物足らず歸つた處へ彼の友達が來て君は何處へ行つた大概にするがいゝぜあの女の情夫を知て居るかと云はれて二人あるものかと肚裡に冷笑へど友達は頓着なくあれの色は庄さんと云ふ製造場の下役少しく意氣張の筋あつて二年越女の方から入揚げて居るのだと聞いた時の先生の顏

色さなきだにを山にでも積まねば筆には中々及び難し小の字はセウ庄の字はシャウ假名使ひでも初めから違つて居るにさて終で似て居るはあんたとぱんた其後先生人に語つて曰く僕もラブには三度失敗したよ

あゝラブなる哉ラブはまことに安手拭染まるも早し剝げるも早し一年一度の失敗は百年生きれば百度の失敗千年生きれば千度の失敗數々御苦勞の末は女學校にも一寸居ましたのと向ひ合つて依然壽命を茶に漬けて召さるゝが落とかや聞けばエリザベス朝と云つても多分は此邊のが跡から跡から沸て來る雨蛙唯我也々々と噪いで居たのだとサ文學隆盛めでたし〳〵

小説八宗

正太夫

諸書を參酌したのでも何でもなし當今大家と呼ばるゝ方々の御規則ともいふべきものを初學者のためにざつと擧示したるまでなり井戸の西瓜のやがて冷かすのだなどゝ思召す可らず

一、おぼろ宗　小説の癖直しはこの宗が元祖なり小説の癖つけも亦この宗が元祖なり即ち古い癖は直したれど更に新しい癖をつけたとの事なりこの門に入る者は極實の極美のと自分は言はね

ど餘處で言はうかと種々なる議論を腦裡にゑがきつゝ書くに限るなり故に存外舞臺の小くなることあり度々流義を改め此うでもない彼あでもない寧お休が宜からうと門を鎖て「今日賣切れ申し」と貼て置くもよし小説の主眼は百八煩惱を寫すじや迄とそッけなく始めてそッけなく終るが得意なりされど其の間に流石は〳〵と二口續けて言せるだけの妙は備へるなり小説繁昌の節は緘默しチト寂れた頃を見計つて小説は美術なり數コット笠トン重マ委リオット富ライ於ムレッ雷スカレイを凌駕するの傑作を出だせや出だせと一遍通り觸廻つて扨又自分は門を鎖ると此の宗の眞言秘密なり委くは大久保邊に行きて内にか外にか

お宿にかと呼ぶべし多分返辭あらん大江の千里といふ曲者早くよりこの宗を膾によみ載て新古今に在り曰くテレもせず困りもはてぬ春の舍のおぼろづくりに泣く者ぞなき試みに安宅松の蟲司に命じおぼろを食せろといへば味ひは大概知れるなり待間がつらくば朧の罪や松の影と鼻唄をうたふべし是れ煙草輪に吹く變體なり

一、二葉宗　又の名を四迷宗と云ふ迷宗は迷執なり或ひは曰く妄執なりと、妄執の雲晴れやらぬ朧夜の戀に迷ひし我心と長唄驚娘にあり蓋しこの宗の寶物「浮雲」をよみ迂み且おぼろ宗と緣引の由をほのめかせるものならんこの宗も昨今門を鎖ぢ居れり

これではあれではと迷ひまよふて幾度となく膏藥を煉るなり名は其體を現すとか四迷とあるも前世の約束なり四辻に立つて泣た唐の伯父さんもこれには及ばぬと匙を投げしよし、臺がオロシヤゆゑ緻密々々と滅法緻密がるをよしとす「煙管を持つた煙草を丸めた雁首へ入れた火をつけた吸つた煙を吹いた」と斯く言ふべし吸附煙草の形容に五六分位費ること雜作もなし其間に煙草は大概燃切る者なり緻密が主にて本尊に向ひ下に居らうと聲を懸るときあれど敢て問はぬなり唯緻密の算段に全力を盡すべし算段は二葉より芳しと評判されること請合なり折々飜譯するもよし但し緻密を忘れさへせねば成るべく首も尾もないも

のを擇ぶべし

一、篁村宗　この宗は一切輕きを貴ぶ吹けば飛ぶよなものなりとも其邊には一向頓着せぬがよし主眼はと問はゞ洒落と答へて獨り呑込むべし趣向は深きを忌む、深ければ自然重くろしきを以てなり一名を竹の舍宗と云ふ竹繁れば藪となる、藪は醫者の仇名なり醫者はお太皷を兼ぬるが多し故に輕口なりこの宗の輕いのはそれと似たでもあり似ぬでもあり治國平天下風なく波なくいつもおめでたいに限るなり京傳かイヽヤ三馬だ三馬かイヽヤ其磧だ其磧かイヽヤ篁村だと斯く極込みながら何處やら臭い所無きにしもなれどそれは保存し置て偶ま生煮えの宗敵に嗅せて

遣るなり「仕合の風吹井の浦、其評判も高師の濱」等其一例と見るべし輕微の間おのづから妙あるものと宗徒は勿論和尙も承知し居るなりこの宗は肉食妻帶を禁ずお膳の上には柚味噌と根岸だけに山椒のつくだ煮チョイと箸の先へ引掛て甜りながら獨酌でやつて居る氣味合なり今にお肴が出るよと云ふのを何かと見れば湯豆腐と知べし他宗から喧しいのが來れば兎角々立つてならないよ緣無き衆生は度し難しと横を向く然らずばいヽサ〳〵と願で返事する等吳々も自得といふこと此宗肝心のひめ言なりこの頃この宗の爲に三味を彈き「篁村宗將に弘布せられんとす」と觸れたる信切者あるを見受けたり

一、美妙宗　この宗には秘蔵のお經あり言文一致と名く飽迄お經に醉て衣紋をつくろふ外見上戸なり一頃はお難有を唱ふる者頗る多く小説の捷徑こゝを渡れと大繁昌を極めたれど當節はチト寂れて「漸寒や石の佛を刻む音」なり何でも一夜漬じや甘酒流じやと口上を添へてこれが美妙宗の本體じやといふものはあまり開帳せぬが得手なり想ふに雜兵の服を着て敵將に近かんとしたる何某の軍略に倣へるものならん或者この宗を銀流しと申したり不埒なることをと段々考へ見るに早く剝るとにはあらずして早く出來るとの謂なりし扨々名譽の事共かなこの宗の初級はマア斯うやるべし「向ふから來たのは男です、下駄を穿て居ま

す、が跡が減て居ます、そして頭は刈込前の散髪です、フケの雪が襟の麓に積つて居さうです、是が女なら何うでせう？、髷を結て居るに相違ありません。」又時々千古未發の新説を挿むことあり其雛形は下の如し「酒を猪口に注げば、猪口の形です、酒を桝に注げば、桝の形です、實に酒は方圓の器に隨ひます、水も亦其の通りです、が水は醉ません、けれども酒も水も流動體です。」總じてこの宗は熱心に經文を誦するなり他宗の耳へ入らうとも入るまいとも斷えず休まず言文一致經をくりひろげること、頭に尊稱辭「ゴ」を加へ「デ、ゴザイマス」で結べば御苦勞で御座いますと申したき程と知るべし

一紅葉宗　硯友大師の繩張内に在て一段逞しきを紅葉宗と云ふ紅葉はもみぢなりもみぢの錦神のまに〳〵この宗神佛混淆と見ゆ雅俗折衷と云ふも蓋し所以あるなり樂天氣取るらく焚紅葉、焚くは護摩なり鳴るは瀧なり護摩を修するや凡人の得知らぬ秘法あり製すれば菓子となり消れば灰となる什物三つ曰く……曰く――曰く《　》隨分目まぐるしく用ふ其用法は文盲手引草なる一書を以てこの宗自ら世に公けにしたれば畧す西鶴と稱する尊像を安置し省筆々々とやたら無精勝に世を送るなり少々は俗物に解せざるも雅客には矢張通ぜざる程を上加減とす是れ雅俗折衷の本旨にして容易に内兜を見透されぬ法なりうまいと言つた

男に解つたかと聞けば何うかすとばかり跡を言ぬこと不思議なれど是れ即ち無精なれば行渡らず渡らば錦なかや絶なんとの敎なりとぞ要するにこの宗は頻りにぶりたがりて折衷ぶりたる揚句薩摩汁を拵へそこねた覺悟大切なり「いづれ煮たもの――南瓜と唐茄子」など其の身上と知るべし兎角この宗はインキの高下に拘らず節儉を旨とし言ひたきこと半分で見合せて然かも腹の減らぬ宗旨なり二月の花よりもくれなゐと云へば節儉或ひは客嗇なるやも知る可らずこの宗子飼の納所ひとりあり惡太郎と呼ぶ中々まめなる奴なり

一思軒宗　この宗を八宗の一つに數ふるは無理なり無理なれど

もお宗旨なり其無理といふは隣家の釜を借て飯を炊くが如く飜譯づくめなればなり其無理なれどもといふは隣釜の飯炊なりとも小說道にをり〳〵蹈込まるればなりお經は簡潔一方さら〳〵としたるを上品と定む、請ふ之れを看よと拂子の先に銘打て取り掛るなり「渠はシカく往たり渠はシカく歸れり」と片假名の肩を怒らせて召仕ひの小女に八つ當りするやうの風ある亦妙なりたとへば霜冱已に甚だしといふ日、前の前の前の朝買たる納豆の殘りにて湯漬を食ふの格と知るべし平たく云へば禪味たつぷり或る他の味ばつちりといふことなり葷酒山門に入るを許さずこの宗は餘り廣まらぬが本意ならん故に委くは說かず隨喜の

涙は各々の勝手たるべき事

（明治廿二年十一月初めて正直正太夫と號したるときの作）

初學小說心得

正太夫

序

烏金黑玉、墨は何うでも黑きものなり碎銀飛瓊、雪は何うでも白きものなり黑白のけじめは胸毛うゑて檜と化したる神代の昔より子守飛んで夫人と變ずる明治の今に至る迄梃でも棒でも動きなき事なり。

黒きを悪白きを善と定めたるは擬物法の神髄を得たる傾城阿古屋が警句より脱化し來りたるものなり芝居にては或都合に依り醉ふたふりして赤面の者を出せども實は碧永が顔は漆よりも黒かりしなり否黒からざる可らざるなり黒と白と氷炭相容れざるは裏町の犬の喧嘩を見ても知るべし。

黒白善悪の區別かくの如く明かなるにも拘はらずきのふの淵はけふの瀬と唐様で書く三代目の馴染深き飛鳥川の流れ清みつ濁りつ丁度宜加減の時なければ降れるは今の世とて純潔雪の如き者にして護摩壇の明王に眉をひそめさするあり奸譎墨の如き者にして絹漉しの豆腐に舌をなめずらするあり出來合の曲尺くねり〳〵て眞の御光を拜し得るなく遂には梢に啼くを鶯と聞て廓のきぬ〴〵これゆゑと喞ち沼にあさるを烏と見て枯蓮を相手に畫にかいて誇る淺ましのさまとも成果てん歟楊子逵路に泣き墨子練絲に泣き華魁夜具の無心に泣くそも〳〵故なきにあらず浩歎大息万斛の涙を閨怨の詩より讓受くるも猶足らざるなり。

我師正太夫先生夙に玆に見るあり不取敢先づ小説界より平げんと欲し曩に其評註主義なるものを發表して大に天下の腰抜武士を驚かしたと此方で云つても先方で驚かねばそれまでなれど畢竟其意の存する所は黒い白いを明かにし文海

の燈臺詞林の標示杭たらんと或書の廣告文を切抜いたるが如き譯柄に外ならざるべし若し先生にして拮据黽勉身上當用長く大道に立つて緣ある衆生を度したまはんには其功田子の浦に打出でゝ見る富士の山より高く其德膳所の城に登りて見る琵琶の湖より深かるべし但し印紙を貼ることは御免蒙る何となれば先生の言立まんまと星をはづるゝに於ては當時流行のカメオてふ莨の煙ほども影なければなり。

評註主義の意味深長なることは世の認むる所か何うだかこれとても一々調べたのでなければ分らず唯類と眞似手のなきを以てすれば評註主義は頭に病無き正太夫先生が一家一

流神託に殆きものなり先生大いにこの主義を擴充し洽く一切を感化せんとの志あり要らざる志のあつたものなり依て其主義を告白するに先ち余等を狩あつめて初學小說心得なるものを講ぜらる余等之を聞てちよつくり曉る所あり隨聽隨錄一冊を成す即ちこの書なり四方八方の書肆より依賴ありしを躰よく斷りしにはあらず賣れぬ時は恐いによりまゝよま一つ玉子酒新聞紙上を假る。

正何位何官誰題字と云はゞ鐵道の里程賃錢表も有難く何學士某譯と云はゞ第一讀本の獨案内も貴き心地せらるゝは當然の事なり今先生蓋世の力を揮つて幽遠なる評註主義のた

めに雲に棧霞に千鳥の大事業を企てらるゝと雖も身布衣より起て宰相とも何とも未なられざることなれば唯其名を聞て鐚一文の價もなく看過もあらん歟さてはふびんの至なり彼がふびんか我がふびんか石童丸が一番のふびんなれどそれは後日の問題としこゝに先生が爲人を畧記して向河岸の古物商が棚に燻りたまふも佛は矢張佛なることを知らしむべし是余等が先生の鴻恩に報うる萬分一のみ。

正直家の祖何から出たかさつぱり分らず三世正太夫神風の伊勢の國足曳の山田なる御師の許に寓す眉を柳唇を桃といへば兎角美人は草木になりたがりて恰も好し名から榊孃

を娶るの約ありしもいそのかみ古市の娼家油屋の妓お紺の虻なる浪士福岡貢の爲に讒せられ其意を果さずして已む坊間有觸るゝ伊勢音頭の狂言筋道は皆謬り居れりそれより後は亂脈にて今の正太夫先生は何世の孫か系圖なければ當りも着かねど產れは同じ其邊なり一を聞て十を知り號砲を聞て飯を食ふ敎へざるも太鼓は敲くものなるを知り學ばざるも三絃は彈くものなるを知る視るは眼聽くは耳幼にして詩を賦し文を屬す白鳳を吐き錦袍を奪ふ談陣風流四座傾くとは先生が事なりとかや然れども一も傳はるなく屠屋に尋ねても知らぬと云ふ豈遺憾ならずや。

先生曰く盡く書を信ぜば書無きに如かずと故に書一冊も讀まず又曰く金錢は德義の毒藥と故に錢一文も貯めず舜何人ぞとすましたものなり我邦の豪傑はと問へば北條高時と答へらる一天菌乘の君を窘めたてまつり當今御謀叛と公言したればなりと君子はと問へば唐琴屋丹次郎と答へらる澤山の女房を伸好く丸めたればなりと聞く者嘆服せざるはなし多分今年は衆議院議員に選まるゝならん。

一日先生南窓五厘の花笑ふの下に於て筆を執り一氣呵成數三四百の大文字を作らる曰く「逍遙生が文は大丸の舗に仕へて客あしらひに心を疲らしたる形あり二葉亭が文は觀音

の境内にて嘗て眞鍮の迷子札を彫居たる姿あり紅葉は理髮床の椅子に不行義に凭れて頤髯剃らせる人の如く美妙は押繪の羽子板の色褪たるを袂にくるんで立つ人の如し露伴は經一卷を懷ろにして味噌摺口を搜すのみ思軒は煎豆を嚙んで獨り一心に講義するのみ學海は何處迄も平仄を詮議し鷗外は何處迄も診斷書を認む南翠は手を膝に載せて壁と睨み競し篁村は墨斗の筆を甜つて名月やと首をひねる嵯峨の舍には金物打た帽子を買てやるべし思案には熊手の簪をさゝすべし漣にはでんでん太鼓あてがひ置くべし忍月には仕込杖もたせてぶらつかすべし」と首もなく尾もなくこれぎり

跡は書けざりしと先生の見高く識廣き驚くに堪へたり恐るるに堪へたり又呆るゝに堪へたり。

世上幾多の才子不才子早く言へば盲と目明この書はこの書を讀む者の外知ることなし小說心得を知つて居るかウンと頷くは讀しなりイヽヤと首を振るは讀ぬなり讀んでむか腹を立つも其方の勝手なれば讀まずして鼻息に飛ばすも其方の勝手なり余等不文を顧みず敢て所思を錄して卷首に題すと云爾。

（一）

諸子よ今日は諸子がかねてより御懇望の小說評註主義に關する講義を開き申すべし諸子は頃日來頻りに評註主義に就て質疑を試みられども正太夫は無沙汰詫の末文同樣何れ其内と躰能く御免を蒙り未だ曾て此主義の何たる事を申上げざりし然らば今年今月今日初めて之を解說するかと早合點せらるゝならんがいや〳〵まだの事諸子の如き幼き耳へは滅多に入れ難し否入れたくも入り難からんと正太夫は思ふなり

凡そ此世の中は名實相伴ふといふ事大の禁物なり表は表裏は裏手古舞の肌ぬぎ姿金絲銀絲の綺羅美やかなるも上一枚片袖だけのことにて種を洗へば薄綿の償ひに有合はす肌着を丸め込んだも珍らしからず見切賣の重箱蓋と實のシックリ合かぬるが常例

なり況んや言行相反するを權謀と云ひ權謀逞しきを才子と云ふに於てをや淺ましきを世と云はゞ世に淺ましき事はなき筈なれど兎角内兜の見え透く者ほど厚く〳〵と目塗に氣を懸け白銅貨ジャラつかせて生憎銀ばかりと横を向くは往々正太夫のお見掛申す所なり試みに何なりとも執て見られよ口上の勿體多きものは請合て面白くなく言立の長き寶物は屹度妙ならず其奥の手には天機を漏すの恐れありなど云へどこれは追詰められし細小路の抜裏然仰せらるゝ當のお方も天機を知ろし召したること曾て無しされば正太夫の諸子が耳に入れ難しと云ふを以て或ひは評註主義もこの喩に漏れぬとニヤリとせらるゝもあらん歟正太夫

は夢に周公に逢ふたる證明書なくては明さぬと云ふにあらず一日も早く諸子に傳へたきは山々なれど諸子は尙之れを負ふの力なし生中小石に躓くの怪我あらせんよりはと斯樣の長冒頭を置きて少々は面白からぬ思ひもおさせ申すなり

されば二號活字に花わく添て何々の法傳授料幾千郵券代用一割増と遣りたくも遣られぬはこの評註主義なり廣めるも廣めらるも俱に至難の業なることは諸子も畧知悉し居らるゝならんが彼の高輪に名高き牛の歩みの遲々たるも行かば行得て千里萬里の遠きにも達すべし古くともこの理によりてゆるゆる講說すべければ諸子も其の心組にて倦まず撓まず幸ひに大器晩成を期し

たまへ

高きに登るは低きよりする事二階でお手の鳴るとき明かなり熊野や小督の奥許し受けて謠へば雲遏まり彈けば魚驚くも其手ほどきは岡崎女郎衆なり今正太夫が諸子のために講ずる所は建前に先ちて地均しするが如く評註主義の五十音とも云ふべき小説の心得方なりこの心得には二つの區別ありて一は小説を作る心得一は小説を讀む心得なり作ると讀むと孰れかむづかしきとは目下世上の大問題でも何でもなけれど正太夫は斷じて讀む方を「むづかし」とせりイヤむづかしと云はんよりは寧ろ「つらし」と云ひたし

（二）

小説を作る固より難しおのが磯貝の片戀棚へ上げて知りもせぬ戀の數々より見たこともなき幕の内外の世話まで焼き自分からが其隨一たる百鬼夜行の此世の影を細き命毛きれ易き四寸貳錢の筆に描きて誰やらが口吻妙すと云れんはなか〳〵の仕事なりされども之を讀む者に較ぶれば天地月鼈貸方と借方飛んだ事ともお氣の毒とも一寸には言てのけられぬ程の相違あるなり何となれば小説を作る者は一意讀む者の感動を惹かんとの氣苦勞あるに過ぎざれども讀む者はそれを察して是非とも感動したらしい樣子だけなりとも見せて遣らねばならぬ筈なればなり謂はゞ

小說は感動を與ふる、語を換て言へば强つける器械にてマアマアモウ一つ燗直し熱い所をと酒盃もつ手を押へても酌く形なり昔は久離切てかんどうすると云ふ事あり餘程芥子のきいたものと見えたり故に小說を讀む者は須臾も感動を忘れては相濟まず濟まねば一分相立ぬなり萬一全篇通讀の際感動の氣振なき時は感動をどの邊へ取落したかよく〳〵詮議しそれでもまだ感動の踪蹟が知れぬ時は沈思熟慮胸に手を當て考へ見るべし考へて而して後親父おれより歲上なることを知らば既感動の端緒は得たるなりすべて小說を讀む者は小說を作る者に向て感動せぬと言はれた義理のものにあらず表紙裏へ「乞高評」と作者得意

の筆を染められ代を拂つた覺もなきに手に入る類のものは猶更の事鰯の鹽燒も御馳走とあれば鰈に勝ると舌鼓打て聽せねばならぬと同じ流れのものなり若其感動甚しきに至れば風邪をひくことあり春の日秋の夜卷を手にして感に堪ふるの餘うと〳〵と眠るよりの事ならんが感動と感冒とまんざら音の似ぬでもなし發汗劑がよいと醫者の申すに據れば小說を讀む者は間々何處へか汗をかゝねばならぬ義務もあるなり以上の如くなれば小說を讀むのむづかしきは今更問題とする迄もなく愛宕の山から望遠鏡でお臺場はソレ其處に覩易き道理ならずや概するに小說を作るは苦心を籠るもの小說を讀むは苦心を見當

てるものなれば小説を作るよりも小説を讀むのむづかしき仔細は諸子も大方納得せられしならん併ながら正太夫は之をむづかしとのみ云ふにとゞめず進んでつらしと云はんとすつらしとはやがて懶きことなり懶しとは面倒臭きことなり面倒臭きことは骨の折れるものなり骨の折れることは頭の痛むものなり頭が痛めば病氣が起るなり病氣が重れば厭でも鳥邊山のお客となるなり北邙の塵となるなり息絶るなり百害休むなり命無くなるなり死んで了ふなり小説を讀んで風邪ひくことあらばいつが日之れがためにこの世の年が明けぬとも限らずオヤマア小説が原因でとお長家の神さんは驚くべく怪からねえよと深川の妓女が居たらば呟くべし正太夫は目下或派に於てインフルエンザを探究するが如く小説的感冒の觸接性傳染病なるや否やを調査中なるが就ては今日こゝに評註主義の初歩を講ずるには先小説心得二種の内小説を作る方より始め追て讀む方に移るべし

小説を作るは猶味噌を造るが如し或はフカシ或はチカシあちこちと捻くり廻せども詰る所まめを命と尚べばなり文章を練り趣向を揑ねそれでうまく行かぬ時は大いにこうじることありと是れでは講義が口上茶番に變じたれど矢張其大本は筆先のまめなるが小説の上手なり言文一致の甘味噌あり雅俗折衷の辛味噌あり白き黒き赤き種類頗る多く味噌と小説とは酷だ能く相似たる

ものなるが其味噌を造るが如しと云ふは此等の意味より出でたるにはあらで全くは手前味噌との謎ならんと正太夫は考ふるなり徽生へ易きゆゑ斯く言ふとの説も一理あれど小説に飲く可らざるは手前味噌にして手前味噌の調合加減に因つて巧拙の別ちは生ずるなり苟くも小説を作つて感動の種を蒔かんと欲する者は先第一手前味噌の釀造法を學ぶべし其三州と仙臺とに論なく手前味噌を釀すの法を知らば小説はおのづから出來上がるべく二篇や三篇夢の中にも書き得らるべし紛々たる群小説只是れ手前味噌の塊まりに過ぎず手前味噌の上手は小説の上手、小説の上手は手前味噌の上手なること万世不朽孫曾孫玄孫の末々迄絶て異變あるまじき儀なり

（三）

むかしは手前味噌の味辛しと定まり居たれど兩三年以來兎角季候の不順なるより手前味噌の味も自然變じ勝にて或は甘く或は苦く何うかすると澁くなることあり天地の間日月かけて澁いものと申せば差當り指を實らぬ柿に屈せざるを得ず實らぬ柿は澁い者の代表者ともいふべきなれば澁いものを實らぬ柿と稱するも差支なからん歟實らぬ柿には緣ある黑衣郎も面を蹙むるを以て見れば小説に於ける手前味噌の澁きも隨分讀者に眉八字をかゝせるの力あるものなるべし

總じて近頃の手前味噌は辛きもの極めて少く甘きか澁きかの二つに限ることゝなれるものゝ如しされども其甘きは讀者が見て甘しと云ひ澁きは作者自らが澁しと云ふ彼れと此れと一途に出でざるは些解しかぬる次第なれど其味ひを評するは無論讀者に在ることにて作者自ら言ふ筈なし唯澁き作者は只管澁がらせんため調合の際一寸小指を入れて嘗め試み自から其澁きに感じて一足お先へ澁よがりによがるものと思はる先入主となるといふ語をこれより出でたりとは牽強かいづれにも澁味を賞翫することは讀者よりも作者の方八分イヤ九分イヤまる〳〵何でも大分深し且讀者は時々澁いものを甘いと誤認することあれど作者に

於ては山崩れ水溢れても澁いつもりのものは澁いつもりのものにて己を知るの點よりいへば今の小說作者は皆君子なり君子の德を彰さんため小說心得を講ずる正太夫は猶更の君子なり

手前味噌の料理塩梅みづから食らつて御覽になるは小說作者の責任とも申すべきなるが都合に依てはあまり召上り過ぎて他人までお鉢の廻らぬことあり是即ち前にいへる讀者が感動を遺失したる塲合のことにて讀者が味噌を食はず面を食らつてまごつく間に作者は早くも其感動を拾ひ上げひとり竊かに呑込んで外へは出さぬなり讀者若し其疎忽を良心に愧て感動紛失の顚末を世間に訴へ廣く救濟の策を求むる時は必ずや其作者の出でゝこ

れに答辯するを以て證とすべし

（四）

さて講義は元へ戻りて手前味噌の製方につぐ卷物は記憶と呼る一品なり何につけてもといふ中にも馬鹿につけるもこの藥なりといへば記憶の貴きは今更多言を要せず分けて小説作者には記憶が大切なり手前味噌の味を何うするにもこれあれば自由なり自在なり勝手放題なり見た事聞た事手の屆くだけたぐり寄せて密と仕舞つて置くのかと思へばそれは俗人のする事處嫌はず並べ立てゝ金玉の音を一時に吐かせるなり忘れねばこそ思出さねとは機轉ある遊女の嘘から出た實なれど忘れねばこそ思出す

は小説作者が實から出た嘘の奇特なりされど其奇特にも上中下の階級あり佩文韻府の丸煮を啖ふて山青く水白しを知て居るも記憶なれば八犬傳の芳流閣をお酒で呑んでコヤ喃爾を知て居るも記憶なり今帶締て行くわいなと端歌一つ知て居るも記憶なれば花より團子と伊呂波短歌知て居るも記憶なり白髮三千丈とばかりにて跡が出ずとも起句だけの記憶には相違なく誘ふ水あらば往なんとぞ思ふとだけにて頭は知らずとも下の句だけの記憶に相違無し記憶の範圍廣きは實に驚くべき程なるがこれが地坪の取方に因て小説に巧拙あることゝおもへば彌が上にもオヤが上にも難有く難有く又難有きは記憶なり

然れども一利一害は數の免れざる所記臆の靈驗かくの如くあらたかなれば隨つて飛離れたる間違の生ずること尠しとせず例之ば作者が豫て記臆に存れる古人の妙句を引用せんと欲するにのぞみツイ出兼るまゝお手前物に燒直しと云つては躰裁わるし飜案し或ひは「やら」「とか」等の力を藉てわれとわが氣を引立ることありこれは忘れたるにあらで只思出せぬ迄のことなれば別段咎むるに及ばず思出さずに忘れずにとはこれ等のことを言へるもの歟又記臆の居按排に依りては「草雲雀天に舞ひ」「向ふのをばさん閑古鳥」等間違の秀逸を得ることあり「漢の高祖驪山宮に幸し妃太眞を召し」「長生殿裏日月遲し」「隅田川いざ言問は

ん都鳥」などは不加減にかけては中々直打あるものなれどこれとても記臆といふ種がなくては容易に生へぬものゆゑ矢張難有き内の一つなるべし諸子よ正太夫は諸子の爲に二箇の格言あることを御傳授申すべし手帳あらば書留置かれよ曰く記臆は小說を產む曰く小說の船は記臆の櫂の競漕である確固不拔どちらも千萬年の後に傳へて耻しからぬものなり或者は頻りに記臆に聞噛りなる別名ある由を說けども正太夫は記臆を一の學問と心得居るなり昨夜宴會で逢つた人を今朝見て忘れて居ることさへあるにお芹子の頃授けられし四十八文字は死ぬ迄覺えて居るに由て見れば記臆は決して聞噛りにあらず習はうより馴れろと云へ

と一旦は何うあらうとも習はねば慣れられぬものゆゑ記臆も亦習ふて得る所の純然たる一學科なるや疑ひ無し法學理學醫學工學各天邊に到れば博士號と申すを受くることなれど記臆學のみは博士の設なく其代りとして小說家なる者續々顯はれ出るなり即ち小說家は記臆學の大博士にして決して聞嚙りにあらざる記臆の榮譽を立てぬ程背負ひ込んだる者なり憾むらくは世間の衆くが記臆の學問なることを知ずして漫に聞嚙りと胡麻かしとを煉交ぜたる持藥の如く考ふることを

（五）

記臆は護摩かしにあらず護摩かしは記臆にあらず記臆と護摩かしとは固より同質にあらねど物には退いて考ふといふことあり て其上での意味にては殆んど同根の傾きぐらゐはあるやうなり一口に護摩かしと云へばこそ怪からぬ元護摩かしは天賦の才能なれども云べきなれば之を護摩かしと云はず天才と云はゞおのづから氣高きことに知らるべし但し夜鷹と云ふは賤し辻君と云ふは優しとの論と同日に語る可らず記臆を聞嚙り又は護摩かしと混じ初めたるは天才を洒落にも啼かぬ三年先の烏のいたづらにして前に說ける記臆の間違より多く起因し來れるなれども時に或ひは記臆の格段にすぐれたるが爲めこの汚名を被ることあり搜神記に曰くと書いたのが實は蒙求にあつたのを記臆して居たの

だなどは其好適例なり名所圖會を讀んで廻國雑記を知り鐵槌を讀んで職原抄を知り博物筌を見て伊勢物語を知り節用大全を見て日本歳時記を知りスワこそ得たれと直ちに取つて靈々しく原書の名を唄ひ込むはまたしも至らぬ記憶にて四書五經を淨瑠璃より得歐米諸家の金言を新聞雑誌より得るが如きは最も功勞を經たる記憶なりそれもこれも畢竟は天才が働かする離れ技とてたとへば道成寺の鐘入ヒヤリとさせることあるより遂に護摩かしなる嘲りを皮相論者の加ふるに至れるなりされど心ある者は能く其記憶と聞囓りと天才と護摩かしとの入組みたる仔細を呑込居るにより小説作者たらんと欲するの徒は安心して記憶を養

成し精々ひけを取らざる心掛けが肝要なり今後小説家の傳を記す者あらば必ずや博聞強記の四字は脱さゞるべく都合に依てはこれだけを豫じめ活版に附し置くやも知れざるべし

次いで想像といふことも亦小説作者の缺く可らざる一要素なり天才に縁近きは記憶の肉親とも云ふべきにや字躰は頗るむづかしげなれど實際は苦勞する程の事なし小説が皆經驗より出づるものならば小説作者は世界にあらゆる善行と悪行とを仕盡さればならねど其處を輕々お助け下さるは此想像の御神なり戀の所譯の數々より朝晩の勝手元に至る迄人情も世態も風俗も酒も餅も悉くこの想像の本尊に歸依し奉りて小説作者は筆を執るな

り或時は印度洋に氷を張らせ或時はサハラに薔薇を咲かせ有を無、無を有とする想像の骨折一方ならず正太夫この頃或書の中に「突出し一本の藝妓紅き襟かけて」「熨斗の色あざやかな玉子の折詰」「着たる小袖は双子の堅縞」などいふ想像の新しきが轉がれるを見て想像の羽は大鵬そこのけ何百萬里の外に達くものなるか數の知れぬに感服したり併し世の中はうまく出來たものにて作者想像の筆を飽まで弄せば讀者も亦想像の眼で見て何とも言はず却て膽を挫がるゝものゝ如し宏大なる哉想像の力後に名を變へて附燒刃と云ふとかや想像に就ては他日改めて言たきことあれば今はこまかく講述せず諸子幸ひに咎むる勿れ

（六）

偖又手前味噌を讓す即ち小說を作るには「好き」といふことが入用なり好まずに出來るものはなけれど小說を作るには取分この好きが大切なり好こそ物の上手なれ好でなければ成らぬものを好が好ですることゆゑ上手になるは疑ひなし我豈辯を好まんやなどいふ人あれどそんなことを言ふ奴ほど好なものなり小說も亦好となれば恐しきものにて箸の上下しにては日本臭し小刀の上下し肉汁の二吸目には小說々々とわめき立つるなり但怪からぬは古の阿房が一つの遺言を爲せることとなり曰く下手の横好と是れ何等の妄ぞや（妙ぞやと音相通ぜず）横好とは好の凝結

したるものなり好の骨頂なり好が毛虫ならば横好は既美しき蝶とも化したるものなり詩では穿花粉翅輕と云ひ歌では軒端の梅の花の初蝶と云ひ俳では猫の子の組んづ轉んづ胡蝶哉と云ふ斯く迄名譽あることなるにも拘らずこれに下手の冠を着けたるはあまりといへば物知らぬわざなり今の小説作者の苟にも好に安んぜず横好にならんとする折柄この語の存れるは牛馬諸車止往還の邪魔誡に一大障礙なるが正太夫熟く按ずるにこれは歴史家が古記古書を調ぶるの筆法に倣ふに君かずイヤサ古書によくある通り傳へ〳〵て誤となれる如く下手の横好とは心ひがみたる男の聞間違にて其初めはハタの横好と云しなりと先づ斯う

漕ぎつけたりたとへば名優の技を觀ても兎角其意の在る所を察せずあのゝものゝとハタで種々難題をこねる如きを假にハタの横好と名けしにいつなりけんよいとこさと溝一つ跨いでより忽ち下手の横好と訛るには至りしなりこの頃小説の批評家にも隨分ハタの横好あり立派なる豪氣なる大家を捕へて君の作は短篇ばかりだモット長い大きいものを出したまへとて櫻雲臺の床柱ひとりで擔げと云はるれば恐縮する癖にせがみつき多作は多拙の弊を免れないよとて文久錢でも山に積まるれば悦喜する癖にけなしつけるが如きは正銘正眞ハタの横好なりされば小説作者はいくら好に成てもよしハタの横好が附纏ふ程の上手がよしハ

タの横好事變名下手の横好は小說作者と離れられ〳〵ぬ因緣あるものなれば損にならぬ限りは臆病氣なく下手の横好ではないハタの横好をお供にするが三十六計外の勝なり

元來何が小說作者になるかと云ふことを討ねあぐれば好不好の理は自然にわかる筈なりこれは我評註主義に重大なる關係あることにて是迄この問題に豫を容れし者往々有之しもあまり巧く說當てたるは無しそれも其筈社會にはおのづからなる規約といふものあればなり正太夫も當前なら其仲間を洩れぬのなれど今日此講義を開くに就ては朋友緣者のさかひを置かず親兄弟とも水盃の覺悟の上とて萬一不所存者の刃に罹つて一命を殞すことありとも公事の爲に果つるは死んだのだと思はず殺されたのだと思へば同じ結局のやうなれど一天四海の內今は何一つ恐いものなしと斯う威張つて見せるも實は殺される筈がないと知つて居るからのことなれど若し殺されれば小說は人を殺すの兇器なることを愈よ確むる迄にて正太夫に於ては死んだ後は一切口を利き申さゞるべしサア諸子何が小說作者になるか試みに當て見たまへ

（七）

醫學に精しくば醫學者法學に明るくば法學者政治に達すれば政治家經濟に通ずれば經濟家實業なり何なりおもひ〳〵の得たる

所に力を入るゝは當然の理屈なれどさて小説家となる程料簡の變やら珍やら變珍から汁お芋の煮えたを御存じのやうでもありやうでもなし此んな小むづかしきはあらず學者でもなく役者でもなく坊主でもなく神主でもなく太鼓持でもなく落語家でもなく藝者でもなく女郎でもなく雪踏直しでもなければ羅宇のすげ替でもなき一種名狀し難き手合ひより成れるものにて之を一杯に煎じ詰めれば小説作者はおしなべてイタイの分らぬ者と言ふの外なし今少しく勿躰らしく言直せば英雄にあらざるも未曾有の、豪傑にあらざるも不世出の、利口者が小説作者となることならん歟但し其利口は單純なる利口にあらで頭におの字を戴き

たる複雜の利口なりお利口にも亦種々の區別ありて富士講の先達となり妙法樣の徒弟となるは陽のお利口なれども小説作者となるは陰のお利口なり尋常小學に通ふ頃お利口な坊ちやんでと云はれたる輩の歳稍く長くるに隨ひ益々お利口の深みへ落ちてやがて小説を作りこれ見よと託宣あらせらるゝに至る次第なるべし

一説には云へり何處やらの國に「生て大業を爲す能はずんば寧ろ速かに死を與へよ」といふ語ありしを近頃何奴かゞ其の下へ「然らずんば小説を書かん」と增補したるよし即ち小説は大業もならぬ爾かと云つて死もならぬといふ時書始めるものなりと

果して然らば小説作者は死んだ者も同樣にて運命おもひの外拙く死すべき時に死せずして死にまさる耻をかき居るものと云はざる可らず命長ければ辱多し一應は聞えたれど私やよく見てよく惚れるの論法を以て更によく考ふればこの説太だ謬れり小説に恨あらば知らず孰か好々んで耻をかき果敢ない命を小説になからいて半七が妻のクドキを再びする者あらんやおもふにこれは小説作者の名譽を毀けんとする無禮漢の理を非に枉げたる解説なるべし其一然らずんば小説を書かん」と追加したるが實ならばこれは小説を學ばんとて一旦首を突込みたる男の餘りのむづかしさに舌を卷き小説は殆んど死を與へられたると同じ苦痛

を忍ばねば出來ぬとの意を表白せしものならん即ち小説は必死に書くべきもの死んだ氣で書くべきものといふ譯なり勿論死んだ氣も色々にて死んだ氣で往生するもあり死んだ氣で奮發するもあるゆゑ死んだ氣の死んだ氣を死んだ氣の死んだ氣と混ず可らず其何れの死んだ氣なるかは諸子が勝手の解釋に任すべし死んでも命のあるやうにとは小説作者の謂なることを正太夫はこの講義について不圖發明したり

併しながら今の處小説作者と定まりし者たんと無し小説家といふ名稱は新聞雜誌の上に折々ちらつけども眞に小説を務とする者は皆無とも云ふべく皆々本業ありて其暇に筆に執らるゝ樣子

なれば小說は恰も羽織の紐を打ち下駄の鼻緒を縫ふと一般燈下の內職に似たりされば小說稅を納めよと云へば納めぬでもない顏も見ゆれど稅が要るならモウ廢さうといふ顏一躰に多しこれぞ前に云へる好の凝結にて一寸小說もとはよく〳〵のお道樂なり表紙へポリチカルなどゝ左からぶッつけた演說入の魔物が退散したと思ふ間もなく斯く他界より手を入れらるゝは畢竟小說界の幼稚なるが爲なれば別段何うといふ譯にも行かねど小說作者をエタイの分らぬものとすれば此等は一層沖を越えて越えて實朝なら波のよる見ゆと歌でも詠まうといふ所なり

（八）

どなたかは知らず今聞えたは欠伸と覺ゆ最早大體に就ての講義は了りたればこれよりは作者がいざ其墨を磨るといふに方つての心得方を唯一つ言ふべしそれは作者自身作者を風聽することなり序にも跋にも緒言にも凡例にも口上は精々澤山並べるがよろしく並べねば却て損となることあり尤も其並べ方に種々ありて身にも應ぜぬの廻らぬ智慧のと讀者の前に頭を低げるは昔からの流義なれど當節はあまり流行せず人間が皆正直になりたれば讀者に氣を揉ませぬやう迷惑を掛けぬやう手取早く且ちかづけに作者有丈の分別を整々堂々と繰出すことゝなれり小說とは斯々のものである己の著述は斯う出來て居ることれは僅々三日で

書いたのだ深意は見えぬ所にある世間の奴等がこれを知らぬは歎かはしいとチビ〳〵遣りかけ果は不評は承知の上だ予を何爲る者ぞなどゝ腰なる一刀ぬき放して何うやら讀者が叱られたり喝されたりして居る氣味のもの尠からず聞いても瘡が落ちるやうなれどこれは熱とかいひて何處かの山風の激動より生ずる一種の病氣なり小説作者は必ずこの病氣に罹る者にてこれに罹らぬ程の未熟ならば斷然廢業するに如かず但し始末のいゝことには此熱讀者には傳染らず作者だけの事なれば觸れたりとて死ぬには至らず折々あてらるゝ位のことはあるも其節は寶丹を氣つけに一寸嘗めて其殘りを作者の方へ廻せば重々好都合なり

要するに口上は小説作者になくて七癖有つて始終はづされぬ秘訣なり新聞雜誌に廣告するにもなるべく晴々しき寧ろしら〳〵しき文句をえらみて悲哀を卑猥艶と聞違へることはありとも根限り其功能を數へ立つべし嘘もほらも少々は用ひてよしイヤ少々にては目に立つゆゑいッそまるでの嘘やほらがいゝかも知れず全躰は其書の名より作者の名を大きく書くが上策なり斯くの如くにしてさ〻賣出しとなれば四方八方に評判起り初舞臺から花形の譽を得二度目迄には必ず文壇の新駒と呼ばる芝居の新駒は一人なれど文壇には一度に十二三人現れ出たることあり小説の景氣大なりと云ふべしそれより其ッタ〻一冊の書が或所

の目に留まれば忽ち先生號を贈與せられ苦もなく大家と成上るなり或所とて別段異りたるところにあらず唯「小說大家製造所」といふ看板を掲ないばかりの一合本會社なり今日の世界は小說を書くの世界なる乎奇觀奇觀又奇觀豈是れやれこれ一大奇觀にあらずやなどと餘の事なら遣らるゝ筈を其處が小說の難有さには文學を一切小說で丸め置かるゝにより小說一たびこの門を過ぎれば作者は三日ならずして大家大人名家先生と呼ばれ筆の名も純羊毫や不換金では面白からずと新に艶、麗、妙、奇、逸、雅、雄、健などといふ字を四つ五つ囮めて背負せ込み出色々々と無闇に出色がらるゝことそれは〳〵不思議なり成程考へれば小

說は出色か色摺の表紙をつけて出板するものなれば出色と言はるゝは理屈なり一寸した褒言葉かくの如し故に小說作者にして一刻も早く其技に達せんとおもはゞ取敢ず先づ一本をこゝに呈して出色沙汰の有無に由て其運命を決すべし出色の次が先生號その又次が大家號モウそれで死ぬとも遺憾は金が無いばかり正太夫が講義も一先これで打出しなり諸子よ爾ざわ〳〵と立たずとマアお茶でもあがれさ　（明治廿三年二月稿）

小說評註問答

正太夫

客あり一日刷毛序を以て正太夫を遠い〳〵本所に訪ひ談偶初學小說心得のくだらなきに及ぶ客嘲るに玄の尙白きを以てしたでもなければ正太夫之を解て獨り太玄を守るとすましたでもなければと其客何分新聞臭ければ翌日の紙上に

正直正太夫氏の談話

などと御供にあげらるゝやも知れずあんまり寢覺のいゝ譯ならねばいつそのかぶれと藻にすむ蟲われから問答の顚末を左にかかげて御覽に入るゝものなり

（問）初學小說心得をかしく拜見したり小說を手前味噌の塊りとはよく〳〵おもひ切られたる事なり所謂黃泉に入り蒼天に出るのお說猶あるべし　承　度い（答）いふの水淸らば以て吾面を洗ふべし評註主義にかなひいことならばお尋次第何なりともお答へ申すべくい（問）さらば思つきい廉々御質問に及ふべし小說心得は寧ろ小說家心得にて唯其用意を示されたるに過ぎす肝心の小說とはいかなるものいかなることを主眼とすべきかを明されざりしは不審なり如何（答）御不審にはいへども素われには評註主義と申すものありてそれがための講義なれば小說志願者の爲に大利益なきは勿論にいされど小說の主眼主腦などいふことに

就ては只今仰せの手前味噌一條にて澤山かと存じ世態風俗人情と申した所が格別の事は無之餅を賣るが故に餅屋酒を鬻ぐが故に酒舗なることを知らばハヤ世態は解り居るなり馬を花間に鞭つは貴し車を街頭に挽くは賤しとのことを知らばハヤ風俗は解り居るなり悲ければ泣き嬉ければ笑ひ男は女を戀ひ女は男を戀ふる者なることを知らばハヤ人情は解り居るなり或者が小説家の腹を剖いて世態を寄席に聽き風俗を緣日に察し人情を芝居に觀ると一言の下に斷定し去りたるはあまりの事にしはんがさりとて小説家が有る無しの鼻を上向けて長口上述べらるゝ程の手間日間は入るまいかと存じ現今大家と呼ばれたまふ方々を見上

げたてまつるに一二の返り咲を除くの外概するにお歳若し十四五の春より物心覺えたりとするも十年とは多く世の中を見ぬお眼なり十年の學問經驗何程のことかしべきされども猶能く大家と立てられ猶能く大家たるの筆を揮はるゝにしはずや幇間となつて初めて會席の膳を知り新聞記者となつて初めて芝居を棧敷で見然かも直ちに料理のうまいまづいを論じ技藝の上手下手を評するも誰ひとり疑はぬが當世なればナニモ小説に限つて主眼の主腦のと口に言ふ程の仔細はあるまじくしも強て問ひたまはゞ小説は一讀、字の並びあることを知らしめ再讀、トント分らぬ酒落位ゐに止め置くが宜しく即ち小説の主眼とする所は翌日見

て分らぬ洒落を作るに在りとでも申すべき歟つまり小說の巧拙は洒落の巧拙迄と正太夫は考へん(問)淳朴なる時代には淳朴なる小說あるべし輕佻なる時代には輕佻なる小說あるべし小說は時代に伴ふの影と申す說もあることにいへば翌日見て分らぬ洒落の出づるは翌日見て分らぬ時代なるが故かも知れず當今名代の想像といふことを常に無視せらるゝは如何の次第にいや(答)無視するとにはあらねどさほど難有きものには思はず想像の過ぎたるも見ッともなければ想像の到らぬも見ッともなし想像の甚六とて昔からの厄介ものなり想像といへば物々しけれど今の小說に就て見るに多くはダラウ譚に過ぎず想像即當推量とも申す譯なれば讀者も亦ダラウ的に之れを酌取らねばならず當推量の眞に逼るといふ筈もなければ是は何彼は何と一々讀者が按排よく料理して漸と小說らしく見て遣なりと斯う眞面目に申しては色氣なきに付其察しの足らぬ時はトント駄目なりとの心持より翌日見て分らぬ洒落と申す儀にいへ年少大家いか程えらがらるゝとも多寡の知れた經驗なり經驗なき的に想像の矢は取添へられたるなれど實の處それより先へは餘りうまく屆かぬものなれば想像の多寡も亦知れたものなり若それを强て知れぬとすれば其時はハヤ當推量と成替り居りしい解り易きため一例を擧んに紅葉山人と申せば夙に先生號を受られたる大家なることは世の認

むる所にしが山人の猿枕と題する小說を御覽あるべし其一「すさまじきもの」の末段に

亭主は帳面つける手を休めて、金さん世界は色さねと笑へば、ちげェねッと客は膝をたゝきぬ。

と申す句あり萬に一つ斯樣の者も無いとは限らざるべきも一躰に云はゞ細かい所で儲ける質屋の亭主などはモツト神妙なる者なりこの會話は髮結床の亭主と町内の若い衆とがお定まりの掛合振りと申すこそ適當なれされどこれも大家の作といへば實地々々と頭を叩く者もあらんが是れ即ち想像の變躰なり當推量なり故に翌日見ては分らぬ洒落と申すにてしが又其二「あさましきもの」の内に

店屋物に新獨活のつけ合せを喰ひのこし、飯が白いの黑いのと、(中畧)、難有く勿體なき事なり。

とありこれも妙々と嬉しがれば嬉しがるものゝ新獨活のつけ合せを食殘すは贅澤にあらず腥き物を食殘すが贅澤にし食殘すと云ふは其物に飽たか嫌ひかの二つに過ざれば萬種萬情とは申しながら新獨活のつけ合せを食殘したりとて何程の勿躰なきことか有之るべき山人は新の一字に重きを置かれしかは知らねどそれならば猶更の事常になき新獨活を捨てゝ常にある魚なり鳥なりを珍重がるは至つて難有くなき心意氣なり食ひたい物をこら

へて生姜を嚙るは別段なれど一本の鰹節七分通りは捨らるゝ山谷花屋舗の臺所を知る者の吐くべき句にはあらず山人の猪尾も亦極まれりと云ふべしト斯う云ふ工合に鉄砲を放されては大變なり山人の意は腥き物に飽て獨活を食ひ、獨活に飽て醒き物を食ふに至りたる變化の微妙なる點を寫されしなれば是を讀者が勘違ひするやうにては矢張翌日見ては分らぬ洒落の部類かと存し(問)然らば小説家は年を取らねば不可ぬ經驗を積ねば不可ぬと仰せらるゝ譯にてしや(答)いや〳〵小説家の生れ年月が揃ふて居たとて眼藥にもならず若い若くないには關係無し年少小説家の作なりとも滿天下の男女をアッと言はすれば上手にしァッ

と言たか言ぬか一々尋ね廻りしならねばお請合は申難けれど大家と呼るゝからはァッと言はせたに相違なく、相違なき大家の作が翌日見て分らぬ洒落なれば小説の主眼は翌日見て分らぬ洒落なりと申す次第にし尤も大家を紅葉山人一人と限りたるにはあらず紅葉山人の作のみが翌日見て分らぬ洒落と申すにはあらず蔭口きくは正太夫の本意ならねどこれは猿枕の生憎むが手近にありしためなればこの邊誤解なきやう呉々も祈りし(問)洒落の段は了解致し御説に從へば小説はつまり一の道樂に過ざる如し有るが自由ならねば無いが不自由にもあらず識者は之を如何すべくしや(答)然り小説は一のまがひもなき道樂にし誰が賴ん

だでもないにふら〳〵と字を並べて奇だ妙だと自分若くは仲間内の評定に心を勞らし想の實めと好んで世間に追廻され文學とやらを賣ること鰯を賣るが如きは道樂でなくては出來ぬ藝にい近頃の小說は文字の末にのみ走るとて小說家は少說家なりと申しゝ者もある由これらは道樂の眞味を解せぬことゝ相見えい識者々〳〵と澤山さうに申いへども識者と申すは世にある者には無之其證據には己が識者ぢやと名告りし者もなければ誰々が識者ぢやと指名されし者もないにいはずや偶ま識者らしく見える人も敢て識者に質すなどゝ書くことあれば世には全く識者はない筈にて無い者の笑ひ聲も泣聲も聞える道理なければ道樂家は一

向其邊に頓着も遠慮も致さぬ儀にい(問)就て伺ひたきは小說はいかなる心持にて書くが宜しくいや(答)されば己だ〳〵と思つて書くもあり今笑つたのは誰だと言ながら書くもあり何條彼奴等にと思つて書くもあり不可ずば勝手にしろと言て書くもあり一泡吹せんと思つて書くもあり流義いろ〳〵なれど正太夫の考へにては死人に物を言ふ心持にて書くが第一かと存じい死人はいか程面白き話を聞しても膝をすゝめぬとゝもにいか程だらなき事を述べても欠伸する氣遣ひなく又いか程名論卓說を聞せても感服せぬとゝもにいか程不條理を陳じても駁擊する氣遣ひなく實に始末のいゝ者にい試みに今日の小說を執てこまか

に閲したまはゞこの理はおのづからわかり申すべし人間の中にも取分けて小說家は短所を誇るの動物と申すことなれどもそれは畢竟死人を相手に仕過たる罪にて小說家が短所を誇るにはあらず死人があまり口をきかぬ所爲なり死人と同居すれは唯我獨尊と見ゆるも致方無之い暇あらば大家方の門を叩き廻つてお尋ねあるべし多分この心持を具へ居らるゝことゝ存い(問)其儀も相分りいさていかなるを足下は大家と認められいや(答)仔細はいはず世に大家と呼ばれい方々を矢張大家と心得居りい也この頃不圖「大家號は田之助の如し」といへる新奇の研究を遂げ申い但し田之助と申したりとて彼の有名なる紀の太夫にあらず初め澤村百之助と稱し後に田之助と改名して吾妻座に墮落したる役者のことにい(問)其又謂れは(答)小說安に妨害有之中上難くい(問)今となりて口を緘ぢたまふは卑怯なり遠慮なきを評註主義と申されしにいはずや(答)御執心の事かなさらばお明し申すべし「大家號は田之助の如し」一寸はをかしきやうなれど謂れを聞けば別段不思議は無之いそも田之助が百之助と申い頃には相應に面もよく藝もよく評判もよかりしが何かの續きを以て田之助の名を襲ぎいてよりは前日に似ぬ下手と相成其仕打其動作殆んど別人かと思はるゝ程なることは好劇家の能く知る所にい現今小說の大家もこれと同じなる慢性加答兒に罹り居らるゝや

に相見えゝ其未大家となられざる以前には隨分面白きものもお見せ下されしが一朝大家號を授からるゝや俄かに勝手が違ひ樣子が變りて出る作も〳〵面白からず果てゝが定規の如くにゝ或ひは大家の作であると一から十迄買冠る氣味あるより一層大きく失望する故にもゝはんがゝァ大家となれば面白くないものと相場はあら方決したらしくゝ尤も大家號を受られゝには幾分か飛離れたる腕前もありて後に見れば其時の小說はおのづから懸賞問題に應ずる答案の如き姿となり居りゝことなれば面白かりしも道理なれど幸ひに合格して大家勳章を賜はるとゝもにまづくなると云ふは何う考へても分らず故に大家號は田之助の如し

と申す次第にゝさて又これに依りて「大家號は惡魔の如し」とも申し得られゝ大事の〳〵名人上手に取附て其本心を搔亂すを大家號の所爲なりとすれば大家號は實に惡魔なり貧乏神なり背後でまづく〳〵と澁團扇を振て居るに相違無し看よ本年の書初に篁村先生をして對扇といふ凡作を出さしめ且其他にも先生の輕妙なる調子は段々消えて酒が理に落ちたとも云ふべき傾を生ぜしめしも南翠先生に何と立派なヘボで御座らうと先生が極めて不得意なる口つきイヤ先生にも似合ぬ愚文を草せしめ殘燈の影ぼんやりと退隱の氣を促せしも大家以前になきことにて惡魔が所爲に外ならず美妙齋先生が小說家をやめて籍を詩人に移さ

るゝとかいふ噂も多分悪魔が勸めたものなるべく御室先生の嫉えらみが不評なるも悪魔のわざなるべく露伴先生に風流佛程のもの又と出させぬも悪魔のいたづらなるべし序ながら逍遙先生がお頼み申しもせぬに壹圓紙幣に朱を打て履歴譚を空に飛されしも矢張この悪魔が蔭の仕事かも知れず兎に角今の小説界に於ける極悪の魔者は大家號なることゝ疑ひ無之しゝ(問)さては大家には成るなと申さるゝ譯にしゝや(答)まづそんなものならずに濟むことなら成らぬが勝にしゝ今一息小説界を賑さんには一先位記を剝奪するに如くことなしと正太夫は考へしゝ併し剝奪と申しては世間躰悪きに付孰れも自身に先生號を擔ぎ大家號を背負

て最初呉れた所へ返上申さるゝが宜しからんと存しゝ(問)若し其大家號を足下が沙汰するの役に當りたまはゝ如何樣の計ひを用ひられしゝや(答)正太夫ならばあらゆる小説家へ大家號を贈り申すべくしゝ凡そ人間が極の〳〵心の奥に思ひ居る事ほど實なるはなし苟にも小説を書て世に公にしたまふ方々孰れか己は一番まづいと往生し居られ申さんやそれ〳〵思召のあるは必定なれば正太夫はそれなる實に就いて片つ端から大家號を投げ與ふると鞆祭の蜜柑の如く可致しゝさすれば田之助となり悪魔となるの憂も隨つて消ゆべくと存しゝ

猶小説界にも英雄崇拜の弊ある事西鶴の小遣帳も元祿文學とし

て頂き奉つるべきや否やの事小說家はなるべく邊僻に住ふべき事批評家を松葉で突々き殺す事等の問答に及びしが折柄正午の號砲いつよりも音高きに驚かされゲツソリ減たる腹をかゝへて客は辭し去れり　（明治廿三年三月稿）

評註端唄文學

正太夫

色氣ないとて苦にせまいもの賤が伏家に月もさす見やれ茨にも花が咲く田植戻りに袖褄ひかれ今宵逢はうと目遣ひに招く合圖の小室節芒に殘る露の玉かしくと讀んだが無理かえ

色氣ない云々突然言起しあれば解說甚だむづかしけれど是れは何散士と申す大家が夢現の境にあるが如きタワイなき小說を出せしを或批評家が得意のステツキを揮つて智に於て通ずるも情に於て感ずる所なしと言ひしかば之にこたへて色氣

の無いは向ふの勝手なり苦にし玉ふなと慰めたるなり、賤が伏家に月もさすとは其小說が月界の事を記したるに由るならん一說には散士が書たる月界の人物は唐か宋か何れ支那より移住せし者のやうに見ゆれば何日迄も爾では御座らぬ地球も進めは月も進みまするとの意を賤が伏家に寓したるなりと云へど些迂入りたり信ず可らず、見やれ茨にも花が咲くとは散士が其頃何の家主人なる名を以て風車と題する天使ごかしの韻文を丸め上たる内に「墻に開く薔薇の花か？」といふ名句ありしを取りたるなり茨と薔薇と異れどもわざと伏家に取合せて洒落た所が唄なりと知るべし、田植戻り云々これは屹度

だよ〻袖褄ひかれて晩にかゥンと點頭く形即ち合點するなり散士の宇宙主義と云へば評判の合點のいゝ品ゆゑ斯くは言ひしならん一躰散士の文は合點の仕易き質なり試みに眞似れば烏は飛びます烏は羽があります不思議ですマァざつと斯うなり誰か合點せざらんや然れども烏の羽毛黑きに說及ぼしたることなしと云へばそれは散士自らが文にするの前已に合點し了つたるなりとの事合點か〳〵、小室節はおむろ節なりと云ふ者あり猶考ふべし芒に殘る露の玉とは其文玲瓏玉の如しと賞めたるなり風吹かば散るとの意味にあらず或ひは曰ふ露の玉は涙なりこの邊滑稽の背後なるべしと、かしくは可笑く

の畧なり散士五右衞門を氣取り責任論といふ葛籠を背負て可笑いかと遣つたことあり今又可笑いが何うしたと一番文壇を睨返したるなり兎角獨芝居には彼樣の所作のあるものなり尤も多の〳〵しは仕舞口といふことあればもうお仕舞で御座らうとの意なりといふ說もあれど何がお仕舞か分らず多分小說のお仕舞かイヤ〳〵註のお仕舞ぢやぬば玉の闇とお前に登り詰め二かいせかれて忍び逢ふ夜は夢さへ黑塗の枕言葉ぢやないかいな

烏羽玉の闇と云へば俯仰上下唯眞黑なるは勿論なり當ト黑衣魔と云はれたる黑き表紙の文學雜誌ありて渾々と雄大の筆を

揮つて勘定する程の長評論を遣りければ其事を唄はんため烏羽玉のと出懸たるなり闇なればとて目先が見えぬ足元が知れぬ鼻を摘まれても分らぬといふ謎にはあらず、お前とは我より彼を指す詞即ち平生の精神榮譽を此黑表紙に悉皆入揚るとの意なり二かいは二くわいの誤りなり毎月二回位ゐは是非出版したけれど都合ありて當分月一回の發行なれば扨なんせかれてとは云ふなり忍逢ふと云へるより考ふるも看客が跡を急くと解するは大なる謬說と知るべし、夜は夢さへ云々これは黑表紙の親玉が至極の筆まめにて褒られても譏られても何方を問はず反駁し且折々名を匿みていたづらすることもあ

ればあの分では夜夢にも筆は放されまい大方雜誌の表紙も自分で黑く塗らるゝのでがなあらうとの意を示せるものなり、

枕詞云々は初めの烏羽玉を受て輕く結びたるなりといふ者あれどそれは平凡なる解釋なり腹鼓宇都宮すもとりの足柄山是皆枕詞たれば我黑塗社中にはレッキとした國文學者が御座るとのことを暗にきかせたるなり

粹な浮世を戀ゆゑに野暮にくらすも心から梅が香そふる春風に二枚屏風をおしへだて朧月夜の薄明り忍び〳〵てあひぼれの口舌の床の涙雨池の蛙も終夜ふんに鳴くではないかいな

この唄は自ら若隱居を以て居る某大家に出馬を促すものなり

粹なる筈の浮世に君の如く考へ込んで野暮に堅いは何うしたものだと初めから勸告口調なり、梅が香とあるは往年この大家が梅の花に見立られたるを云ふ春風も亦この大家に緣ある文字を取たるなり、二枚屏風には理想とか寫實とか書いてあるなるべし日を經れば經る程屏風の奥へ隱れて我れと世に隔たらるゝゆゑ恐いのだらう駄目だらうといふ者もある一頃朧月夜に如くものぞなき朧々と云はれた春の月も今ではいよよ薄明りのぼんやりたる者だナントそれでも命は惜いかとの無量の意を含めるなり忍び〳〵より涙雨迄は唯勸告者が眞心の程を言顯したるに過ず、池の蛙もあの通り鳴くでは御座

らぬか君も偶には鳴いて驚かし玉へとなり併し鳴いても人が驚かぬ時は何うするか其段は評註者も少しく言ふに躊躇する所なれど元來この唄は左迄意味深きものにあらざる如し

紫の結び目堅き緣の糸解けぬも色の深綠待つに來ぬ夜は筆の先うらみかさねし命毛も硯の海へはまる程深い淺いは客と間夫苦勞するのも男ゆゑ

紫の結び目云々は同氣求むる一派の若者共が紫といふ社を設けて堅く結び合ひ自ら梁山泊と稱して誇る由を云へるなり、深綠と云へば松のことゝ思ふべけれどこれは杉なり杉も常磐木なれば深綠と云ひて差支無し偖其杉の本元なる鞍

馬山には天狗住むと聞えて杉と天狗とは離れまじき者の如く昔より言傳へたればこの深綠とあるは天狗杉のことゝ知るべし餘の者ならば兎も角も烏天狗が己は〳〵と集りたるなれば幸ひに解けずに居るといふ唄の意なり烏天狗の烏といふ字と烏合の勢の烏の字と同じきより種々に解釋する者あれど皆僻言なり誤らるゝ勿れ、待つに來ぬ夜云々これは其社の勇士と自任する衆が猶も黨與を募らんと頻りに筆の先を嘗めて待ちたれども紫の朱を奪ふといふ本文通りの工合に行かざるより其の勢力なきを密にうらみたりとの事なり、命毛とは其の社の面々何れも字と云へば命と書くゆゑ故ら加へたるなりと

云へど實は一心命之助といへる同社の謀士が名を詠込みしなり硯の海も矢張社名の頭字より取來れるなり、山の手を海とは可笑しけれど陷れば陷るほど世間が見えず紫の初元結で御座るの由縁の筋の紫で御座るのと武藏野の菫が神經熱に冒されたやうなる功能を說けども內實安房上總を圓山の望遠鏡から見る仕合せ江戸前〳〵と江戸がられても「せくなせきやるな」を三下りで行くことを知らず俗とは扁から書くか作から書くかも辨まへずに只雅ぢや〳〵と鳴立てるアレは紫ではない胸先だ陷るな〳〵と此處氣味合の文句篁村氏の所謂讀方必要の段なり、深い淺い云々〳〵是も亦手が込めり元この

紫は本朝文學の發達を計るとの趣旨なりしが中ごろ我れと能く似たる結社の興りしより之れと競爭せんず色見えしも兎角彼方の黑は深遠にて此方の紫は淺薄なりとの世評ありしを唄ひしなり現に定家の歌にも、おもだかや下葉に交る杜若とあれば無論紫が下なることを證すべしといふ說あれど大いに然らず此深い淺いとあるは人氣のことにて如何にも黑と比較したる語なれど唄の意は黑はお客なり紫は間夫なり黑よりも紫の方人氣深しとなり努々混ずべからず、苦勞する云云斯くて間夫なりける紫も黨勢を張らんとさま〳〵苦勞したるが障ることありて遂に情婦が許へ引取られ居候と成つて暮

らすも何故と云へば男が立てたいばかりだとの義なり男を立るためには檜笠を冠つて平日の所作迄も賣つて居たが所作で賣るとは役者のやうな小說家だと云はれたこともある今度は紙衣を着る番だと結末の處稍歎息の氣ありと見て可なり

葉櫻や窓を明ければ山杜鵑又も啼くかと待つ内に松魚〳〵オヤ勇ぢやと飛んで出る浮氣な性ではないかいな

葉櫻の花無きは勿論なればこれは批評家の事なり窓と云へば上手一間の竹格子をおもひ起すべけれどこれなる窓は誰も不知と我ひとり澄まし込んだる庵の窓なりこの批評家兎角名を惜むの風あれど悪戯は中々の好物にて我詠んだる歌をば詠み

人知らずと見せて他を惑はすこと屢々之有大慈大悲の觀念樣といへる守本尊を俄長者が甲子飯に於ける如く難有く庵内に安置したてまつり夢想のお膏藥と稱へて鯨の骨を飴で煉りたる如きものを四面八方べた〳〵と貼歩くが得手なり窓を明けて厭世と樂天の詮議に暇を潰し熨斗餅は長方形であるが時に或は楕圓形となるを忘れてはならぬなど〻說法することあり偖唄の意は山杜鵑を聞いて感じて居るかと思ふと松魚の呼聲がいく〻と云ふ、涙華の田鶴が月に啜くを喜ぶかと思へば武藏の駒が霞に嘶くを結構だと云ふ之れを分りよく言直せば西鶴々々と元祿がるかと思へば今度は馬琴々々と忽ち百年

ばかり引下つて文化となる、酒だといひ餅だといひ右だといひ左だといひトント定らぬ所は浮氣娘の男好みをするが如しとなり猶異説あれども長ければ畧す

藝者商賣初めより得心づくで斯う成つて今では野暮な女房氣も浮氣な酒に紛らして座敷勤めて客さんの機嫌を取るが可笑しいか三味線彈くが不思議なかコレ甚介も休み〳〵言はんしたがよいわいな

藝者商賣云々これは氣の利いた小説家が無名菌を茶にした唄なり小説にもいろ〳〵理屈を附けたがれど讀む者もなければ感服する者もない多く讀せるには多く賣ることだ賣るは

即ち商賣である商賣となれば掛引のあるも亦已むを得ぬ所だ野暮を言ひなさんなよとの義なり、浮氣な酒云々一々評判を氣に懸けては居られぬが先づ褒らるれば三層倍に聞き貶されば十分の一に聞て紛らかして居るとなり、藝者だもの客の機嫌も取ります三絃も彈ます可笑くもない不思議でもない小説家だもの下手も遣ります出來そこなひも御座ります可笑くもない不思議でもないそれを得心づくの小説家たり批評家たれば小蒼蠅い口小言をいふ正太夫づれの甚介も休み〳〵が宜らうとの意味なり此女恐しくひらけたりと知るべし

この他「風吹いて路も絶えなん雪の夜半」は鞭風吹いて韻文の

道絶々なるを云へるなり「一言が十言に向ふ嬉しさ」は一寸障ると忽ち引捕へて洪水の如き議論を聞かせらるゝを云へるなり「同じ事二度書せたわいな時鳥」は一つ物が新聞に出で雜誌に出で其果が本となるを云へるなり「愚痴も出る筈女ぢやものを厭なものなら何故また初手に」は退歩りとの噂ある大家の所懷を云へるなり「腹の立つ時や茶碗で呑みな」は理不盡の不平を述べて腕を扼するの人あるを云へるなり種は幾干でもあれど分量の鮮い處が評註主義の極意なれば一先この邊にて切上ぐべしつまる所文學は猶鼻唄の如しとだけが分ればそれでよしそれでよし

（明治廿四年一月稿、六字南無右衛門と號して）

文學一からげ

正太夫

蘿蔔は野菜の一つなれど其一つをも猶ほ野菜といふべくば小說は文學の一部なれど其一部をも猶ほ文學といふべきにや流行にまかせて文學の二字を被らしつ其一からげと題したるは差詰十把出さんとおもへばなり長きもあれば短きもあれど旨とする所は異るにあらず能く之を解する者は大々〳〵々々家なるとゝもに之を作れる者の一倍の大々々〳〵々々家

なるは言ふを俟たず

其一把

思軒居士

浦里時次郎（清元）

雪は朝より降續けり浦里は己れの居室に在りて雲の如く黑く濃やかなる髪を撫でつゝ獨語せり「何故に余はシカク初めより渠を愛するや、余は實にシミ〴〵と惚れぬきたり」

時次郎は登り來れり「浦里、何等か余が面を合すに不都合の事なきや」浦里は起ちて忙しく迎へり渠が顏には瑠璃のごとく輝ける二箇の眼を有するなり「見世は出たり、今は何人も此の

閾を踰え來ることあらず」「嗟、斯の如く建築の宏大なる二階に余が六尺の體軀を措くべき處さへあらず、是れ余が何等かの因果ならざる可らず」「然り時次郎、御身は極めて窮屈なるべし、余は信ず、御身が余を愛する太だ深きにあらざれば容易に斯の屈辱に堪へざるべしと、余は實に御身が厚意に謝せざるを得ず」浦里は時次郎の膝に倒れかゝりて其温かき唇を渠が手に加へたり

時次郎は悄然として言へり「如かず余は去らむ、余が此處に一分時を送らば一分時御身を苦むるなり、三分時送らば三分時御身を苦むるなり、若し百年、百年余が此處に送らば百年御身の

壽を縮むるなり、御身の壽より百年を減ぜば如何、是れ余の忍びて爲し能ふ所なる乎、余が曾て御身に語りたる希望は今日全く畫餅に屬したり、余は竟に據る所を失へり、余は唯死すべきなり、御身賴ひに一遍の回向を懈るなかれ」突然起ちて往かむとす浦里は慌てゝ渠が袂に縋り着けり「時次郎、御身は狂せしにあらざるなき乎、余は未だ死したる人の消息に接したることあらず、誓紙は將に仇にならむとす、果して御身、果して御身、御身死せむと欲せば先づ余を殺せ」身を震はして泣沈めり既にして廊下の方より進み來る足音あり「來れ綠」例の尖りたる如き聲は遣手の萱なり此の聲は兩人をして甚しく畏懼の念

を生ぜしめたり浦里は半身を現はし「お萱、綠は下に行けり、御身は何等か綠に求むる所ある歟」萱は目を圓くして嚙つく如く言へり「然り華魁、昨夜より流連せる御身の客は何の地に籍を有する人ぞ」「余はこれを詳かにせず、何れかの子息なりと聞けり」「華魁、御身は余が御身より幾干の年月をより多く經過せるを知るか、虛僞は一時を掩ふも永久を保つ能はず、余は早く渠が時次郎なるを知れり、華魁、樓主は最前より御身を呼んで止まず」浦里は愕けり今は單に謝するの外なきなり「饒せお萱」されど萱は頭を掉りて肯かず

浦里は引かれ行けり時次郎は屏風の裡より引出され激しく擊ち

据られたる後クヾリ戸の外に突出されたり雪は夜に入れども歌まず起上らむとする時次郎の面を撲て散亂せり

其二把

美妙齋主人

お駒才三（常磐津）

窒素と酸素、空氣はこれの混合したもの、酸素と水素、水はこれの化合したもの、さて妙です。青は青で微塵不思議は見えぬものゝ、赤をまぜれば紫、黄をまぜれば緑、そも〳〵配合が造化の妙なら、造化は内職に紺屋でも爲るかのやう、割て見れば志かも不躾。男を婿と云て女を嫁、これを合はせたのが慥夫婦、夫婦の堅めは二世三世です。

「合點の行かぬ……」思案ながら才三は呟きました、太い息の間から。長々涙々の身を信切に世話を爲てくれたお駒、それが今夜婿を取る、唯聞いたばかりでは信けられず、しかし考へると嘘でもなさふう。何時迄痩涙人に見留めのない情を立てるよりも、いッそ……といふやうな念の誰かにすれば浮ばぬでもない事、と思ふと蹈込んでもやりたい無念さ、口惜さ、握詰めた拳に五躰震へてギリ〳〵と齒――まだ一本も抜けぬ――を嚙みました。が、大事を抱へた身、性根の腐つた女を相手に爲るにも及ばずと、燃るやうな胸を纔に摩つてもそこが未練！分別の投がきまらず煩惱の突ばりが利いて、何が無し勘辨

の土俵を踏切る、立後れの故でなくもありません。

「髪結さん」下女の知らせに駈て來たお駒、よそ〳〵しく、それも故意と、呼懸けてそして跡先看廻しました。

「才三さん、逢ひたくつてよ」少しは心配らしい顔附。

「逢たかつた？」才三は睨めました――勿論眼で

「何が逢ひたい、今夜聖の來る事も殘らず聞いた、狐め、狸め、よく此才三を欺してくれた」突然飛蒐つて引倒し、襟髪を取て押へて滅多撃に四つ五つ、突放したまゝ看返りもしません。

「アレー」助けを呼ぶにもさすが忍び音、さめ〴〵と泣伏した姿は宛ら雨の海棠、涙の赤く出ぬのが不審な位。やつと顔を

あげて――まだ眼に露を持つて――

「お腹の立つのは尤も、がそれはあなたの邪推、お屋敷に居た時分を考へて御覽なさい、妾は天神さまへ願掛けを爲て、一生涯梅を斷ちました、で風邪をひいても黒燒ができぬ代り、鰻と喰合せの心配はありませんでした。一時も早く今夜の事をしらせて、談合したいと待て居たもの、察し強いあなたにも似ず愛想盡しは聞えません、打て腹が癒るなら三十でも五十でも、百でも千でも萬でも億でも勝手におぶちなさい、打たれゝば痛いのは承知です」怨は見上げる目一杯、ピッタリ膝に縋着いて正躰も唯泣くばかり、さすが才三も手持無げです。

「そんな事かとも思つたが、徐々うぬぼれが首を上げました。

「腹が立つのも和女が可愛ばかり」あらあの鼻毛」「町髪結にまで姿を窶したのも、まことの茶入を捜し當てゝ一日も早く歸參したい願ひ、和女の氣はよく知つて居る」

「それでは疑ひは晴れましたか」背を撫づる手にお駒は取り附きました。

「晴れたとも」一方が縋寄れば一方が引寄せる、其睦じさ。火は水を沸し水は又火を消します。發矢！人の足音、ふたりは周章てゝ手を執つたまゝ衝立の陰。清少納言は書落しました。

（明治廿六年六月作）

新體詩見本

正太夫

外山調

（一）

火鉢の上に鐵瓶が
落て居るとて無斷にて
他人の物を持行くは
取も直さず泥坊で
泥坊元來不正なり
雲を霞と逃ぐるとも

早く繩絢ひ追駈けて
縛せや縛せ犯罪人

（二）　福羽調

我日本の内とても
年を取れるは婆さんぞ
若き婆さんなきのみか
不思議に婆さん女なる
是れぞ即ち所謂の
然りと雖も日の本の

女は遂に婆さんぞ

（三）　上田調

今釜出でしほやゝのの
いともおいしきあぶり芋
手に取り見れば湯氣の露
丸焼月に似たるかな
晝餐にかへて買はまほし
一口やれば忘られぬ
汝が又の名の十三里

この味めでぬ人やある

（四）　鐵幹調

鐘は上野か遠草か
白きを見れば夜ぞ更くる
「姑蘇城外寒山寺」
數ふる指も寐つ起きつ
首縊らんか鴉の海
ぶら下らぬぞうらみなる
身をば投げんか鷲の峰

もぐり込まぬぞ恨なる
小楊子むづと手に執て
喉笛美事に搔切れば
ちよいと痛めど血は出ぬ
死するも命別儀なし
天地玄黃千字文
無理心中は止むべきぞ

（五）　佐々木調

小桶を籠めて立まよふ

岡湯のあたり雲起り
踏はだかれる町内の
頭の背に龍躍る
臀連なる柘榴口
手拭頬にあてがひて
そは中々に傳の君
きこえ侍らず言の葉の
理無しとにはあらねども
そも逢初めしと唄ひつゝ
羽目板敲き聲高く

やようめたまへ番頭よ
後の新躰詩家たらん者よく〳〵此等諸大家の調を辨へて考へ合
したらんには禅益する所尠からざるべし猶おまけとして懸賞
募集軍歌調と申すを一つ二つ御覽に入るべし無論撰者は鳥居忱
先生なり

（其一）

いざや喰らはん椀の飯
片手に箸を取上げて
煮豆味噌汁香の物
腹のふくるゝそれ迄は

（其二）

殘忍苛酷の債權者支拂命令差向けつ供託金を上納し强制執行申請す解除願はゞ速かに元利揃へて完濟し告知書を得て債務者はほつと一息安堵せよ

もとより秀逸のことゝて例の感々服々實境々々と申す如き撰者の評を附すべきなれど畧す

（明治廿七年十一月作、拙者と號して）

明治三十年五月十六日印刷
明治三十年五月十九日發行

あま蛙
定價金八錢

編輯兼發行者　大橋新太郎　東京日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　愛敬利世　東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍工場　東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

版權所有

次號豫告

塚原澁柿園君作

密告

正價八錢　郵税二錢

文壇の老將として、雄健華麗の文章家として、普ねく世人に知られ居る所の澁柿園君、其縱横の筆を揮うて、こゝに此編を著さる、官吏と相場師と、相結むで事を圖るの秘密を訐き、之れに配するに車夫と賤妓の戀を以てす、想既に奇、文亦た妙、備さに人心の機微と事情の錯綜とを叙し來りて、光燄紙面に赫灼たり、請ふ一本を購ふて其妙を味ひ給へ。

袖珍小說

毎月二回發行　洋裝袖珍

正價　●壹册金八錢●六册前金四十五錢●拾貳册前金八拾錢●郵税一册に付二錢

小說の出版日に月に盛んに、我邦文運の隆昌、古來未だ曾て今日の如きはあらず。本館偶々感ずる所あり、玆に袖珍小說を出版す。本是れ一世の名流巨匠の筆に成り、所謂金聲にして玉振なるもの、其想は俊邁奇拔、其文は艶麗雄大、實に文界の偉觀たるに背かず。表裝亦美術大家の新意匠に成りて、明窓淨几の下、紳士淑女の好侶伴たるべく船に車に、山に伴ひ水に伴ひ、旅窓革囊の珍たるべく、又時に世相を觀て、文章を習ふの徒をして、精讀沈思藉て以て餘師あらしむ。江湖諸君請ふ陸續愛讀あらんことを。

◉第一編　つり的　饗庭篁村君作

つり的は篁村翁が得意の作なり、滑稽百出讀者必ず抱腹せむ、戲文紀行亦其餘技文想脫俗

◉第二編　間一髮　森田思軒君譯

間一髮は題目の如く、生死刹那讀者手に汗を握るもの、附錄として冒險譚一則を添へたり

◉第參編　僥倖　幸田露伴君作

僥倖は金が仇の世の中を寫せるもの奇想天外より落つ其他紀行あり雜錄あり各一種の有妙

◉第四編　彫像師　内田不知庵君譯

彫像師は泰西名家の作を不知庵君の譯せるなり譯文明晰一字一句苟もせず實に近來の名什

◉第五編　忠孝義烈　三人武士　福地櫻痴君作

三人武士は櫻痴翁得意の好題目勇者の面目躍如たり其文其想淡中美味あり妙云ふべからず

◉第六編　天製絲瓜の水　幸堂得知君作

天製絲瓜の水は幸堂翁が作中の傑物也能く天上界の光景を寫して妙想神を奪ふ附錄亦可誦

◉第七編　小御門　依田學海翁作

小御門に添ふるに尹良親王と辨内侍の二編を以てす翁眉雪能く南朝を說く就中此是好文字

◉第八編　江戸自慢　**男一疋**　須藤南翠君作

男一疋は南翠君の尤も經營慘澹の作なり編中の人物悉く活動して些の遺憾なし作中推壓卷

◉第九編　**あま蛙**　齋藤綠雨君作

あま蛙は綠雨君長所の皮肉文字添ふるに初學小說心得其他隨筆五種を以てす其文寸鐵殺人

◉第拾編　**密告**　塚原澁柿園君作

密告は澁柿園の作なり添ふるに號外附錄なる小說を以てす文に奇骨あり其想亦頗る脫俗す

◉第拾壹編　**腕ためし**　山田美妙齋君作

腕ためし、しゞみうり、無名姬、古根の四篇合せて一篇を成す短長疎密各種の妙あり奇絕

◉第拾貳編　**杜鵑一聲**　遲塚麗水君作

杜鵑一聲に添ふに縞財布を以てす附錄の上毛の三山なる一文は麗水君得意の文章兩々可讀

◉第拾參編以下の目次は追次廣告すべし

帝國文庫

全部完成

正價　一冊金五拾錢●十冊金四圓六拾錢●三十冊金拾參圓●五十冊金貳拾圓●郵稅一冊拾六錢通運料一冊拾錢

我日本出版業の開けしより未曾有の大出版なる帝國文庫は、古來稗史小說中の最大著述なる、太閤記、八犬傳を始め、數百千種を蒐集し今や五拾卷を以て、茲に完成を告げ、未曾有の出版業全く終れり全部皆家々の書庫にありて、日夕机頭に上らば、永く娛樂の、珍寶たるを得んか。

自第一編至第四編	眞書太閤記附朝鮮軍記	全四冊
第五編	源平盛衰記	全一冊
自第六編至第八編	南總里見八犬傳	全三冊
第九編	東海、木曾、奥羽、江島、道中膝栗毛	全一冊
第十編	梅曆。春告鳥	全一冊
第十一編第十二編	通俗三國志	全二冊
第十三編	柳澤、越後、黑田、加賀、伊達騷動實記	全一冊
第十四編	傑作集	全一冊
第十五編	京傳傑作集	全一冊
第十六編	種彥傑作集	全一冊
第十七編	星月夜鎌倉顯晦錄	全一冊
第十八編	通俗明清軍談	全一冊
第十九編	通俗武王軍談	全一冊
第二十編	通俗漢楚軍談	全一冊
第二十一編	通俗吳越軍談	全一冊
第二十二編	楠廷尉秘鑑	全一冊
第二十三編	風來山人傑作集	全一冊
第二十四編	西鶴全集（發賣禁止）	全二冊

第二十五編　滑稽名作集　全二冊
第二十六編　其頑自笑全集　全二冊
第二十七編　人情本傑作集　全二冊
第二十八編　氣質全集　全一冊
第二十九編　珍本全集　全三冊
第三十編　自第卅一編至第卅三編　赤穗復讐全集　全一冊
第三十五編　水滸傳　全二冊
第三十六編　忠臣藏淨瑠璃集　全一冊
第三十七編　四大奇書　全二冊
第三十八編　續氣質全集　全一冊
第三十九編　近松時代淨瑠璃　全一冊
第四十編　大岡政談　全一冊
第四十一編　佛教各宗高僧實傳　全一冊
第四十二編　馬琴傑作集　全一冊
第四十三編　仇討小說集　全一冊
第四十四編　淨瑠璃名作集　全一冊
第四十五編　俠客傳全集　全一冊
第四十六編　續仇討小說集　全一冊
第四十七編　近松世話淨瑠璃　全一冊

●夢……二葉亭四迷
●薩摩がたり……西村天囚
●心中……二十三階堂
●開運札……小金井喜美子
●心づくし……小金井喜美子

文藝倶樂部臨時增刊

小說八家選

●惡の善……山田美妙
●當世外道……幸田露伴
●百鬼面行……正直正太夫
●戀のぬけがら……尾崎紅葉

本號の口繪寫眞銅版畫は一新機軸を出し東西兩都の美人をして七福人ならび年中行事を扮擬せしむ、蓋し讀者一驚を吃するものなり

正價金拾七錢
郵稅金參錢